

〈翻 訳〉

エコノミクス  
第10巻第2・3・4号  
2006年3月

アン・ヴァーノン著  
『クエーカー企業家 ジョーゼフ・ラウントリー  
の生涯1836-1925』(上)\*

(岡村東洋光・佐伯岩夫訳)

---

訳者序文

ここに訳出したのは、Anne Vernon, A QUAKER BUSINESS MAN The Life of Joseph Rowntree 1835-1925. (初版; George Allen & Unwin Ltd, 1958; 翻訳に使用したのは, Sessions Book Trust, York, England. 1987.) である。

初版が1958年だから、出版後、およそ半世紀になろうかとしているにもかかわらず、敢えて翻訳を試みたのは、この書の主人公、ジョーゼフ・ラウントリー (1836-1925) が英国ではよく知られた人物であるのに、わが国では全く知られていないという事情にとどまらない。

第一に、彼は、チョコレート製造企業家として成功したのち、1904年に三つのトラストを創設し、ヨークを拠点として、英国全体に影響を及ぼす自発的な社会貢献と社会改良活動を積極的におこなった。この活動が、当時よりもより、今日においても英国社会に対して大きな影響を与え続けていることが挙げられる。

歴史的に振り返ると、資本主義が発展するにつれて新しい社会問題が発生

する。日本に住む私たちの感覚では、社会問題には政府が取り組むと思いがちであるが、19世紀から20世紀にかけて、英国においては数多くの企業家が社会問題の解決のために自発的に取り組んだ。政府の手を借りないという意味で、期せずして、それらの活動は小さな政府に照応していた。

しかし、わが国では、個人や企業によるボランティアな活動はまだ少ない。21世紀に入り、財政赤字を理由とした社会保障・福祉の切り詰めや、小さな政府を目指すといいながら消費税の引き上げが既定路線であると言われる今日、かつての英国企業家の社会に対する責任の取り方を学ぶことは、この国のすべての人々にとって貴重な知識となるに違いない。これがもうひとつの理由である。

ところで、ラウントリーといえば、わが国ではヨークの貧困調査を行ったベンジャミン・シーボーム・ラウントリー（1871-1954）が有名である。だが、英国のヨークでは、むしろシーボームの父親であるジョーゼフ・ラウントリーの方が有名である。その理由は、父親ジョーゼフの人物としての高潔さにあると思われる。彼の父親の先代ジョーゼフ・ラウントリー（1801-59）もまた、意固地な高潔さを有していたらしく、市長に推薦された際に、審査法が廃止されて間もない時期に、クエーカーである自分が市長になることは、あまりに節操がない行為であるという理由で罰金を払い、これを断ったと記録されている。

父親に似て表彰や勲章が嫌いであった二代目ジョーゼフが生前受けたものは、唯一つ、ヨークの名誉自由市民という称号であった。全財産の約半分を寄付した三つのトラストの創設に象徴される、彼の社会貢献活動はもとより、私生活においても全く質素であったようだ。現在のJRF本部の入る立派な建物は嘗てのシーボームの私邸であったが、他方、近くにあるジョーゼフの住んでいたクリフトン・ロッジは、質素な家具を備えたものであった。

他方、シーボームは、後年ロイド・ジョージと親しくなり、自由党が解体の危機に見舞われた際にも、最後まで支えた人物の一人であった。中央政界でも知られるようになったシーボームの華やかさと比べて、ジョーゼフはあくまで地味を通したのであった。

さらに調べてみると、ジョーゼフは高潔な人物として、その生涯を終えたのに比べ、シーボームは後年にスキャンダルに巻き込まれ、引退を余儀なくされたという事情もあるようだ。たとえば、彼の引退が息子の就職に絡んで、会社の株式売却を経営陣に諮ることなく行使した責任を問われたこと。また、労働運動を潰すために人を雇い、運動の指導者の後をつけさせ、その発言の矛盾点を指摘させて、指導力を損なわせることを行ったり、さらには、当人は知らなかったのであるが、ドイツ人のスパイを雇っていたことなどが挙げられる。こうした事実は、エイザ・ブリックスがシーボームの伝記を書くために雇った助手の I.M.H.Smart が、嘗てシーボームの下で働いていた助手にインタビューした記録が、JRF の図書館にタイプ印刷で残されていることから判明する。これらのことをそのまま鵜呑みにすることはできないにしても、ラウントリー家の周辺の人たち、さらにはヨークの人たちに対し、やはりジョーゼフの高潔さが与えた印象は、消しがたいものであったようである。むろん、たとえこうした事実があったとしても、シーボームの労働者福祉や福祉国家の形成に対する貢献、業績が無になるのではない。

そのジョーゼフであるが、彼の人物紹介という面で忘れてならないことは、彼が代々続くクエーカーの一族に属していたことである。クエーカーは、いわゆるピューリタン革命の時代に登場したプロテスタントの一派であるが、聖霊を重んずるという彼らの個性のゆえに、長く虐げられてきた。創始者のフォックス (G. Fox 1624-1691) やアメリカに渡ったペン (W. Penn 1644-1718) が有名である。長年にわたる迫害にめげず生き延びてきたクエーカーは、社会的に迫害された人々や災害を受けた人々の救済に積極的であった。歴史的には、19世紀半ばに起きたアイルランドのジャガイモ飢饉の際に、逸早く救済活動を行った。今日ではフレンド会や基督友会と呼ばれ、絶対平和主義で、反戦運動・平和運動で知られる。武士道精神で人気の新渡戸稲造もアメリカでクエーカーになった人物である。

名誉革命の後、定められた寛容令によって社会的に排除されたのは、カトリックだけではなかった。ユニテリアンとともにクエーカーもまた、社会的に排除された宗派であった。事実上非国教徒を公務員から排除する審査法と地方自治体法が廃止されたのは、1828年のことであった。ピューリタンの一

派として彼らは質素、禁欲、勤勉を旨としていたが、先代とともにジョーゼフは、文字通りこのモラルを導きの糸として生きた人物であった。

ジョーゼフが行った活動の面では、従業員に対する福利や社会的なチャリティ活動のほか、本書でも取り上げられているが、特に、禁酒運動と庭園村作りを挙げなければならない。社会改良運動に関しても、他の人が取り組んでいない事柄に対し、先駆的に取り組むというのが、彼らの特徴でもあるようだ。同年代のクエーカーで同じチョコレート製造で名を成した、バーミンガムのカドベリーとともに取り組んだ、反ボア戦争キャンペーンや貴族院廃止運動は、彼らの反骨精神をよく表している。

なお、ヨークという町は、英国でも屈指の歴史的な遺産の残る観光の地である。ヨーク・ミンスターや国立鉄道博物館、シティ・ウォール、ヨービック・バイキング・センター、カースル・ミュージアムを見て回るついでに、ラウントリーゆかりの場所を示す地図「ラウントリー・ウォーク」(訳者注；The Rowntree Society 発行の小冊子。ヨークのインフォメーションセンターで購入可)を参照しながら、19世紀を回想するのをお勧めしておきたい。

翻訳は、ヨークで通訳や翻訳業を営む佐伯氏と、福岡で教職に就いている岡村の協働作業で行った。佐伯氏の訳文を岡村が検討し、疑問点などを佐伯氏に問い、二人で相談する形で進めた。その後、専門用語や文章表現などについて岡村が若干手を入れて完成させた。

岡村が知人の紹介で初めて佐伯氏に会ったのは、1985年夏から約1年ほどヨークに滞在した際であった。佐伯氏は、初めての英国で戸惑うわれわれ家族にご配慮をくださり、貴重な情報を提供いただいた。その後、1991年から岡村は学生の引率などで再三ヨークを訪ねる機会があった。それらの機会にお会いすることも多く、英国と日本の社会について大いに意見の交換を行うようになった。岡村もヨークの町に大きな影響を与えたラウントリー一族に関心を持ち、調べるようになっていった。やがて佐伯氏から協働作業の提案があり、快諾して進めた次第である。

## 共訳者紹介

佐伯岩夫 1937年生まれ。ヨーク在住26年，通訳・翻訳業。主な訳書として以下のものがある。

- J. Henry Newman 「信仰と理性の関係をめぐって」『信ずること』新教出版社1974，（共訳）
- J. Delorme 『マルコス福音書の読み方』中央出版1976
- W. Bidle 『十字架の使途』あかし書房1979
- J. Loew 『私の弟子になりなさい』中央出版1986
- G. Simmon 『メグレと田舎教師』河出書房新社1978

\*本稿は，全19章のうち，第7章までの訳である。なお，章タイトルは，訳者が付したものである。原文でイタリック体の部分を本稿ではゴシック体で表記した。

\*\*Anne Vernon はペン・ネームで，本名は Martha Naish (1911～1976)。彼女は，ジョーゼフの娘 Winifred の第二番目の息子であった Richard Ellis Naish (1912-1988) と結婚した人物である。

\*\*邦訳にあたり，JRF 図書館の司書 Vaughan Birbeck 氏に細かい事実確認等で助けていただいた。記して感謝申し上げます。

(以上，岡村 東洋光 記)

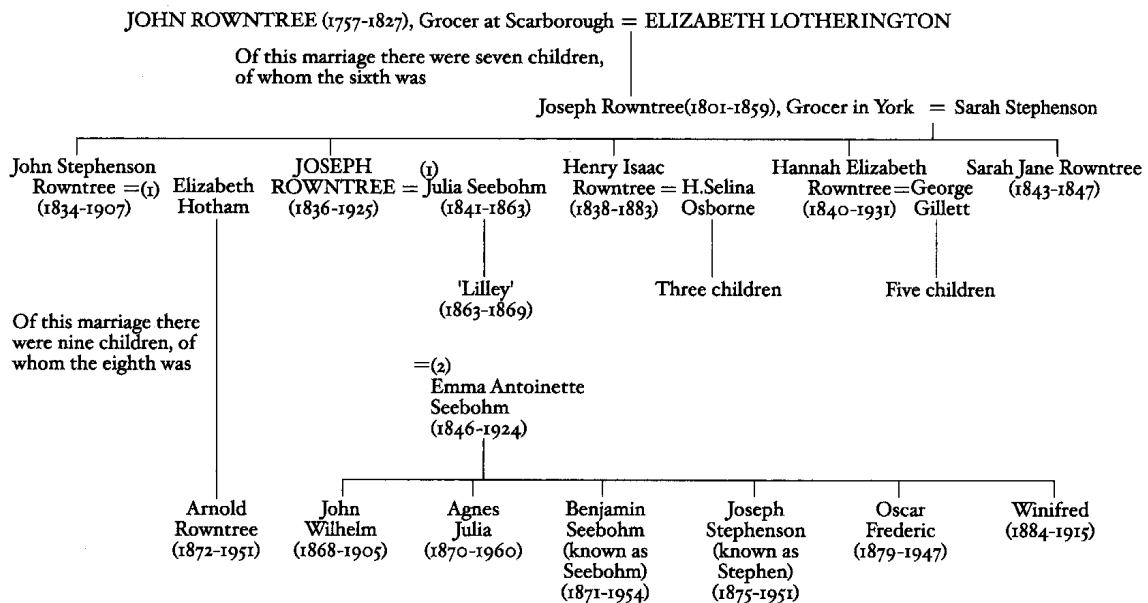
## 原著者序文

私がこの本を書いていた間に，実に多くの人々が，色んな仕方で助けてくれた。私は，古い手紙，家族の家計簿を見るのを許してくれた人々に，そして地誌的なパズルを解いてくれたり，歴史上の細かなところを確認してくれた人々に感謝申し上げたい。なかんずく，あまりに多い人々の中で，特に，William Wallace, C.B.E., J.Bowes Morrell, Ll.D., Peter Rowntree, B. Philip Rowntree, Joseph R. Naish, John W. Harvey, Roger C. Wilson, B. P.Johnson, M.A., F.S.A., そしてフレンド会図書館のスタッフに感謝申し上げたい。

Jean Rowntree には、あらゆる手助けや助言、そして特に、未完成のままであった手稿を読む際に、大変お世話になった。

以下の諸氏は、親切にも、彼らの著作から引用することを許して頂いた。  
Unwick and Brech: *The Making of Scientific Management*, published by Sir Isaac Pitman & Son. G.M.Young: *Victorian England, Portrait of an Age*, published by Oxford University Press. Miss V.M.Clarke: *New Times, New Methods and New Men*, published by George Allen & Unwin. L.E. Waddilove, *One Man's Vision*, published by George Allen & Unwin.

### ラウントリー家系図



This table has been abbreviated, in the interests of clarity, to show only Joseph Rowntree's nearest relations and those who were closely associated with him in business. The marriages of his children have been omitted.

## 第1章 ジョーゼフの生まれた世界

1925年3月2日月曜日「デイリー・ミラー」北部版は、その第一面に新たに作られた墓のそばを歩く群衆の写真を掲げた。その見出しには、「ヨークにおけるジョーゼフ・ラウントリー氏の葬儀」とあった。それは非常に大きく、ほとんど一面全体を占めていた。上端右隅の小さなスペースには、小さい活字で「ニューヨークに地震」というニュースが載っていた。

89歳での死が、少なくとも一時的には、地震よりも重要だと思われたこの人は、生涯にわたりヨーク市民であった。しかし、ヨーク以外では、彼の人物となりはあまり知られていなかった。彼の名前はココア、菓子製造、全国的な禁酒問題、モデル村の建設、そして公益のために提供されたトラスト基金の設立とのつながりで想起された。彼の経歴はニュースとなるような種類のものではなかった。それでいて、彼は歴史の一章に印を残し、その重要性は死後30年以上経った今になってようやく明らかになりつつある。彼は近代産業の誕生に一定の役割を演じ、中世的な仕事場から大規模な工場への類型的発展を目撃した人たちの中の一人であった。

それは彼の生涯の間に起こったことであった。なぜなら彼の仕事の経歴は71年間に及んだからである。彼は子供の時に最後の駅馬車を見、年老いては最初の飛行機を見た世代に属した。この間に新聞の大見出しには、クリミア戦争から第一次世界大戦の休戦に至るまで、があった。彼が幼い頃にはヨークまでの鉄道はなかったが、老人になるよりも前に、自分の工場用に支線が敷かれた。このような革命的变化の全期間を生き抜くということは類い稀な経験ではなかったが、それを偏見なく受容し、未来が受け容れることのできる条件に、過去の基準を翻訳するということは、ただならぬ功績である。ジョーゼフはそれを成し遂げた。しかもそれは妥協のない工場の壁の中でなされたのであった。

事情は幸先のよいものではなかった。「暗い悪魔の碾臼」がとり壊され、忘れ去られた後も、産業革命が人々の心に投げかけた影は、何年も消えなかった。機械はそれを操作する人たちよりも重要であるという信念、雇員の従業員に対する絶対的権威についての議論の余地なき前提、工場が次第に大きく成長するにつれ労働者が仕事に無関心になること、これらすべてが憂慮の種であった。

彼自身の会社の中で、彼はすべての状況が発展して行くのを眼下に見た。1869年にラウントリー工場には12人が働いていたが、35年後の会社には3,000人を超える従業員がいた。この期間に、近代産業を悩ますすべての問題が事業の拡張と同じ速さで現れて来た。古い家父長的なシステムのもとで、徒弟を勤めたこの人は、どのようにしてこれらに対処していったのだろうか。

それは調べてみるに値する問題である。なぜなら彼の方法は申し分なく成功したからだ。彼の会社は青年期を生き抜き、古い世界の不幸な遺産を負わず、新たな世界へのいくつかの興味深い理念をもつ近代的企業として登場してきた。

これはジョーゼフによる産業史への貢献だった。これはおそらく彼自身の時代に支配的であった思想的風土に、あまり影響を受けなかった人によってのみ、なされえたことであつたであろう。彼は反逆児ではなかったが、彼には革命的素質が多分にあつた。彼は自分の事業において、あるいはその他の場合でも、容易には**あるがままの状態**を受け入れなかった。彼は野心に駆り立てられなかったけれども、彼の関心の範囲がすべて工場内にとどまったわけでもなかった。それでいて、彼は徹頭徹尾、例外的に優れた事業家であつた。やり手ではあるが落ち着いた、聡明ではあるがでしゃばらない彼は、熱中することもあせることもなく、己の道を歩み、安易にその進路から逸らされることはなかった。

ジョーゼフは、ウィリアムIV世統治の最後の年、1836年5月24日に生まれた。彼の父親はヨークの中心、ペーブメントに食料品店を所有し、家族は店の上に住んでいた。ジョーゼフの母親は、出産の後のベッドのなかで、窓の外に、市の日には群集のざわめき、田舎からやってくるガチョウのわめき声、敷石の上に行く堅い車輪の響きを聴いたし、また、朝の早い時間にロンドン行きの乗合馬車「ハイ・フライヤー号」とか「ウェリントン号」の出発を告げる御者の角笛を聞いた。

ジョーゼフの生まれた世界は、奇妙な対照が見られる所だった。国会改革を目指した最初の法律は、4年前に成立していた。6人に1人の男性に投票権が与えられたが、特権階級の古い牙城を揺るがすことはほとんどなかった。大地主たちは、いまだに彼らの村々と何エーカーにも及ぶ農地を、何の制約もなく支配していた。あちこちで飢えた農場労働者が干し草を燃やし反対の意をあらわしたが、穀物法廃止問題は多くの人々によって真剣に受け止められることはなかった。チャーティスト達は、まだ労働者のための選挙権の請願を起草してなかった。あちこちの工場では女性や小さな子供たちが、劣悪



な条件の下で長時間労働をしていた。

ジョーゼフが生まれる3年前に、コベットは、「イングランドの製造業の覇権は3万人の少女の労苦に依存している」と言った。

それはまた、機械に依存していたのであり、新しい発明の時代であった。どの産業においても、1年も経たないうちに製造工程が次々に変化した。ジョーゼフの母親は17歳の娘時代に、世界最初の鉄道列車がストックトンとダーリントン間を走るのを見たが、彼女の息子は、電気が蒸気の動力に取って代わり始めるのを見ることになった。

イングランドは世界の工場と呼ばれたが、ジョーゼフが子供の頃はまだ人口の3分の2が田舎に住み、働いていた。製造業の町は農業の風景の中の黒い染みのようなものに過ぎず、そこで何が起きているかについては誰も気にとめなかった。「古い支配階級の勢力圏の外にあり、彼らの自然的指導者たちにもおろそかにされ、産業地区は排水設備も、警察も、統治も、学校もなく、放任されたまま拡大していった」。(原注 G.M.Young, *Victorian England, Portrait of An Age.*)

この時代の人たちは、彼らの周囲の状況がそうだったように、しばしば首尾一貫しない立場をとった。ジョン・ブライトは、飢えている農場労働者のために穀物法と戦いながら、過剰労働をさせられている工場職人を助けようとしていたシャフツベリー卿と戦った。奴隷制廃止にあれほど尽くしたウィルバーフォースは、自国民を無力なまま、産業支配者の恣意的支配下に置くことに力を貸した。彼は「労働者の組織」的活動を非合法化した団結禁止法の確固たる支持者であった。

福音主義の運動がハナ・モーアをメンディップ・ヒルに、敬虔なパンフレットとスープを配るために送り、ウェスリーの支持者たちを北部綿業町の不案内な地区に送った。しかし、それは時として思慮深い人たちに、こうした断片的な奉仕が必要とされることのすべてなのかどうかを考えさせた。多分、何人の人が本当にスープを必要としているのか発見することの方が、もっと望まれるところだった。いつも飢餓の瀬戸際のところにいる家族がいることは、依然として一般的に認められた事実だったけれど、その数を知ることが重要だったと思われる。1832年の救貧法委員会はこの問いに由来するもので

あり、別の議会調査がこれに続いた。統計の時代が始まったのである。

ジョーゼフの子供時代、ヨークが市の境界を超えた世界の事情に悩まされることはあまりなかった。大きな工場はなかったし、ミンスターとともにこの町の議論の余地のない象徴であり、中世の遺産であるシティ・ウォールの内側にスラムはなかった。市場（いちば）はこの町の商業生活の中枢であり、毎週、農夫とその妻たちが近隣の田舎からやってきて、家禽類や野菜を売り、食料品を買った。ラウントリー家の食料品店は「青物と食物」の市の立つペーブメントにあったので、この田舎の商売をとらえるに適切な地の利を得ていた。

ジョーゼフの父親は、やはりジョーゼフとよばれたが、1822年彼の誕生日にこの店舗を買った。彼はスカーバラの生家から乗合馬車の外側に乗って、たぶん自分自身の大胆さにいささか興奮しながらヨークにやって来た。ジェームス・バックハウスという名前の友達が彼と一緒に競売に行った。それはスケルダゲートの「象と城」という名の宿屋で行われることになっていた。競売人は不都合なことに酔っていたが、ジェームス・バックハウスの提案で二人の若者はこの男の頭を冷水の入ったバケツに突っ込み、彼が勤めを果たすに十分なだけ酔いを醒まさせた。こうしてペーブメント28番地は先代ジョーゼフの所有地となった。

店舗と住居はしばらくの間空き家になっており、前の所有者は倒産していた。すべてが荒れ果て、手入れはなされてなかったが、建物自体は優雅なジョージアン風の様式で、二つの弓形張り出し窓があり、そして店の入り口の上にはきれいな半円形の明かり採り窓があった。成年に達した最初の日にこれを買った若者にとって、それは素晴らしいものと思えたに違いない。

先代ジョーゼフ・ラウントリーはエネルギッシュな人であった。新しい家を整理し、事業を展開するのに一ヶ月しか掛からなかった。ただ、彼の「調度品」は多くの親類からは不必要に凝っていると思われた。彼は新しいカウンターをマホガニーで作らせ、住居に通じる通路を塞ぐために重い鉄のシャッターをつけた。店舗の階上の長い居間には、三つの高い窓に厚いカーテンがかかり、暖炉の前にはスチールの炉格子が置かれていた。

21歳にして先代ジョーゼフは、10年の食料品商経験を持っていた。彼の父はスカーバラに店をもっていて、彼は10歳で学校を去り、そこで働いた。どういう訳かこの店はあまり繁盛せず、明らかに先代ジョーゼフと彼の兄ジョンの二人の生計を支えるものにはなりそうもなかった。そこで、ジョンはスカーバラに残り、ジョーゼフはヨークに移動した。未婚のエリザベスが家事をするためについて来た。

それは非常に若い人たちの世帯だった。というのは最初の二人の徒弟は、先代ジョーゼフが雇った時、ともに13歳だった。彼らはジョーゼフとエリザベスと共に店舗の階上に住み、ラウントリー家の一員とみなされた。

皆とても勤勉に働かねばならなかった。店は週6日間、朝6時から夜8時まで開いたし、市の立つ日はさらに夜10時半まで開いていた。もちろん、早仕舞いの日などなく、日曜日以外、終日休みの日は聖金曜日とクリスマスだけだった。朝、開店前にジョーゼフ店の二人の少年たちは交替で掃除し、シャッターを巻き上げ、夜寝る前にすべてを片付けなければならなかった。

この長時間労働は18世紀においては普通で、世紀半ばまでは普通の習慣として残っていた。ジョーゼフと徒弟たちには、ともかくも彼らの仕事の成功という慰めがあった。最初の棚卸しでは帳簿の右の資産の欄には残高があった。以後もペーブメントの店は事業において深刻な後退をすることはなかった。

年が経つにつれ、先代ジョーゼフは次々に若い人を雇い、住居にも店舗にも多くの追加と変更がなされた。彼は独創心に富み、自分の事業をより便利に運営する工夫を喜んで行い、家族の快適さのための出費を惜しまなかった。彼は若くして、「微々たる節約」よりも、自分が必要とする金を稼ぐ方が容易であることを発見した。

1832年、先代ジョーゼフはマンチェスター出身のセーラ・スチーブンソンと結婚した。湖水地方での一週間の新婚旅行の後、花嫁をペーブメントに、そして今では1ダースからなる世帯の責任者として連れてきた。

セーラ・ラウントリーは結婚した時に、24歳でしかなかったが、彼女の「家族」の大きさにたじろぎはしなかったようである。彼女は若い徒弟たちの母親役をし、店の都合で必要になる少しずつ時間のずれる厄介な食事の準備を

し、夫の經理を手伝い、大勢の客をもてなした。

1834年にラウントリー家の最初の子供が生まれた。男の子でジョン・スチーブソンと名づけられた。ジョーゼフが二年後に生まれ、次いで1838年に三男のヘンリー・アイザークが続いた。

ラウントリー家は数世代にわたってクエーカー教徒だった。フレンド派の信仰と習慣が彼らの生き方すべてに浸透していた。ペープメントの世帯には特別な雰囲気があった。そこは本が豊富にあり、徒弟たちには食料品販売とまったく無関係な趣味の追求が奨励される場所だった。夕食の席で、マコーレーの随筆が議論され、しばしば議会報告書が朗読された。午前中は砂糖を計ったり、コーヒーを焙じていた少年たちの昼食の席での会話は、人の噂話になることはほとんどなかった。「召使は人の話をするが、良家の人々は事物を論ずる」というのがビクトリア朝時代の格言であった。ラウントリー家はこの基準でいうと良家の人々であった。

だがそれは、彼らが自分達のことを言うのに用いる言葉ではなかった。それというのも、彼らはいささかも社会的な見えを張らない人々の孤立したグループに属していたからであった。ジョーゼフが子供の頃のフレンド派は、彼らが「世間」と呼んだところのものと自分達の間にあえて距離をおいた集団であった。

ジョージ・フォックスという人が、17世紀の半ばに会派を創立した。彼は既存の諸教会に満足せず、最終的に、真理の象徴はあまりに頻繁に真理そのものをおおい隠すので、一定の祈禱形式と外面的な典礼は有害である、という結論に達した。神は直接個々の魂にかかわるのだから、「司祭を雇う」必要はない。

クエーカー教徒は、彼らが生まれて最初の33年間、信仰ゆえに厳しく迫害された。寛容法成立後も、事業をおこなう上で多くの些細な不自由に遭遇した。農民だったクエーカー教徒は、通常、十分の一税の支払いを拒否した。というのは彼らの認めない教会に貢献しようとしなかったからである。彼らの財産や家具はしばしば押収され、その結果競売にかけられた。それからまた、彼らは、職業の選択を大いに制約した様々な「神の教訓」(testimonies)

を保持していた。

武力の使用は非キリスト教的という信条に基づく『平和の証言』は、若いクエーカー教徒が陸軍や海軍に入るのを不可能にした。オクスフォード大学もケンブリッジ大学も非国教徒に閉ざされていた。数人のクエーカー教徒は弁護士だったが、芸術家になる人は多くなく、音楽家は皆無だった。誓約をおこなうことに反対する明確な『証言』があった。それは、誓約をおこなうということは、聖書に手を置いた時に使う真理と、普通の時の真理という二つの真理があることを含意していたからである。また、芸術は人生の真の目的からの危険な気晴らしという、公式化されてはいなかったが強い感情があった。

彼らの特質を変更もしくは修正させるような広い世間からの影響は、クエーカー教徒の家庭にはほとんど入らなかった。1859年まで他教派の人と結婚することは、フレンド派の会員権を剥奪されることだったので、一般的に言って若いクエーカー教徒はクエーカー花嫁を選んだ。彼らの子供達は、家庭かクエーカー学校で教育された。彼らは成人になると、ほとんどの場合に実業界に入った。医者を目指するか、科学のある分野で例外的な才能がある場合を除いて、彼らに出来ることは他にあまりなかった。

多分、彼らにはそれほどわずかの職業しか開かれていなかったことを恨んだ人もいたことだろう。確かにジョーゼフの父は、彼の密かな野心が常に自分の船の船長になることだった、ということを知っていた。彼は海のそばで育ち、彼の母には5人の兄弟がいて、皆船長で、彼の子供時代、彼に素晴らしい海の話をした。しかし、彼の夢はフレンド派の歴史における多くの他の人たちの道をたどり、船の後甲板の夢は、ペーブメントの店の会計室にとって代わられた。

フレンド派の若者たちの間には、ある種の挫折させられた野心があったかもしれないが、世間からあえて引っ込んでいたこれらの時代に、その代償もあった。クエーカー教徒は一般的に事業に成功した。これは驚くにはあたらないことで、4千家族の最も優秀な頭脳がほとんど交易に従事した。彼らを偉大な役者、熱烈な弁護士、先見の明のある將軍、創造的な芸術家にでもさせたであろう想像力と知性が、商品の購入と顧客の満足に捧げられたので

あった。

さらに、事業の世界においては、フレンド派の「結婚規制」にはある利点があった。それは家族間の密接な接触、および各家族の金融資産について抜け目なく精通することに役だった。産業的貴族（真のクエーカー教徒はこの言葉を決して認めないだろうが）が育っていった。それは、独自の方法で古い土地ジェントリーのように密接に結びつき、情報に通じていた。若きセシルは、先祖ゆえに国会で常に耳を傾けてもらうことが保証されていたが、特権的なクエーカー家族の後継者は、事業を始めるときに同じように有利な立場にあった。

彼らは、20世紀がほとんど忘れ去った類型の実業家だった。彼らは状況が職業とすることを禁じたテーマを、副業として追求した。通常、彼らの正規の教育は14歳か15歳で止ったが、その後、彼らの多くは、余暇をほとんどの学校を驚かすほどの規模で、読書と学習に使った。この伝統は19世紀の終わりまで続いたが、その頃はまだ、鉄鋼製造業者でありながら王立地理協会の特別会員とか英国の鳥類の権威であったり、あるいは、最新の女性モードを見せびらかす特権階級でありながら、トロロプの小説がまだ流行する以前にその本格的な評論家だった人などを見出すのは不可能ではなかった。

これが若きジョーゼフの背景だった。不利な立場は明白だったが、有利な立場はすぐには明らかにはならなかった。それでも有利な立場は**あった**。というのは、フレンド派は自らに厳しい限定を課したが、すぐれた人格の男女を生み出すことに成功したのであった。エリザベス・フライとかジョン・ブライトのように、フレンド派の外の問題に注意をむけた人たちも、当時の歴史に確かな影響を残した。しかし彼らのさわやかなユーモアと透徹する判断力が、家族の言い伝えの中に——そして、何社かの健全は商業的企業に——生き残っている、ほかの多くの人たちがいた。この人たちの偉大さは、19世紀のクエーカー社会の狭い境界内で生まれ、育ち、学校に行った少年であるジョーゼフが、20世紀の半ばに至るまで依然として例外的であるほど十分に広い知的な視野を得た、という事実から推し量ることができる。

## 第2章 幼年期

「僕らは大変なやんちゃ坊主だという評判だった」と、ジョーゼフはペーブメントの幼少時代を記している。「訪問客が家族を訪ねてきたとき、僕ら男の子たちが自由に振舞っていたので、おそらく驚いたことだろう」。

その他のことも訪問客をびっくりさせたかもしれない。というのは、夫婦関係、両親と子どもの関係が、彼らの生きていた時代にみられたものとは違っていたからである。1840年代初めのビクトリア朝の平均的世帯は、多分、60年代に達成された家庭生活ほど堅苦しい型にはまったものではなかった。それはそうとしても、こどもたちにとって先代ジョーゼフは、同時代のほとんどの父親よりも親しみある、近づきやすい人物であった。セーラ・ラウントリーも「パパが一番よく知ってる」と言って、すべての決定を彼に任せるような、従順で依存的なタイプの女性では決してなかった。両親とも、子供達は目に見えても耳に聞こえてはいけない、という理論には賛成しなかった。とにかく、店の階上の込み合った居住区では、家事や商売が第一ではあったけれども、彼らは、男の子たちがいつも心満たされた、活気のあるものだったという思い出を持つ生活を、家族のために築くことに成功した。

ペーブメントの家は便利ではなかった。付属する庭はなく、三方は密集した「小さな家屋と狭い中庭」がびっしりと囲んでいた。ジョーゼフが生まれた時、パーラメント通りが出来たばかりであった。それは幅広い大通りで、木曜市とペーブメントをつないでいた。パーラメント通りは町の新しい市場として使われ、店の商売に関する限りは有利ではあったが、それはまた、市の日にはラウントリーの家では夜明けから夕暮れまで群集の騒音が響いていることを意味した。

ジョーゼフの父親によって作られた巧みな計画すら、増え続ける家族と成長し続ける商売に、完全に歩調を合わせることは出来なかった。彼は朝、家族のためにもっとスペースをつくるという素晴らしい構想を考えながら床に横たわっていたかもしれないが、食堂を建て増し、隣家から地下室と屋根裏部屋を借りても、本当に十分な空間はなかったようだ。徒弟全員がいまだにこの家で眠り、食事をした。彼らは今では12人もいたのである。

ラウントリーの住居の正面ドアを開くと通りにつながる路地に面し、内側には居間と台所に上がる階段があった。この台所は当時の水準からしてもひどいものだった。窓が一つしかなく、会計室の上の狭い吹き抜けに通じていた。溝鼠や家鼠がはびこり、ときどき瀧過した水のなかに溺死体が見つかった。コックのメアリー・タスカーは溝鼠との絶え間なき戦いを遂行し、鼠退治の成功物語はラウントリー家の若い男の子達を喜ばせた。その他の欠点もあった。先代ジョーゼフの構想の一つは店用の砂糖の蓄えを台所に置くことであったが、新しい荷が持ち込まれるたびに「ごみと不快感」が生じたことは子供たちですら気づいた。最後に、しかし、おそらく少なからず不便だったことは、新しい食堂が台所と異なる高さに作られていたので、いつも20人用の食事を階段半ばまで上げ下げしなければならないことであった。

大勢が住んでいたこの時代には、店の階上のしゃれた居間も改変を免れなかった。若いジョーゼフの寝室を作るために、その一端が仕切られた。白いナイトガウンとマントを纏い、両親の友達が集まっている中を通り抜けてベッドに向かう、若いジョーゼフがしばしば見られた。

こうした集まりはたびたびあった。ラウントリー家は大きな規模で客を歓待した。もっとも、このもてなしはすべてフレンド会の活動を中心とするものだった。小さな夕食会とか音楽の夕べは彼らの社交生活には入らなかったが、季会がヨークで開催された時は、しばしば7、8人が家に泊まり、30人がリレー式に食卓に着いた。こうした折には、ジョーゼフと彼の兄弟たちは床に敷いたマットレスで寝て、彼らのベッドに客が眠れるようにした。

フレンド会は、同時代人たちの多くの日常行動から会員を切り離れたが、彼ら自身の間での多数の社交の機会も提供した。会の仕事は、国中にある異なったセンターで開催された準備集会、月会や季会の複雑なシステムを通して遂行された。これは今でもそうである。時としてフレンド会員はこうした会合に出席するために長旅をしなければならなかったし、彼らへ接待は必ずしもいつも楽しみというのではなかったが、義務とみなされた。

ヨークでの季会の際には、家は満杯になるし、ジョーゼフの母親は手がまわらないほどであった。フレンド派には美味な食事と豊富な食事を非とする『証言』はなかった。実際に、エリザベス・フライはかつて、フレンドにはあ



まりにも多くの「自然的な嗜好」が禁じられていたので、彼らはほとんどの人たちより、食べることと、食物をどのように食卓に飾るかに意を用いると嘆いた。セーラとメアリー・タスカーは季会ごとに何日も前から、暗い、ネズミの出没する台所で働いていたに違いない。

第一級の管理能力のある女性のみが、厄介なペーブメントの世帯に対処できたことであろう。しかし、ジョーゼフの母親はよき組織者以上の人だった。彼女は穏やかな独立心をもっていたので、子供、使用人、徒弟たちの要求にもかかわらず、彼女自身のいくつかの関心事を追及することができた。

クエーカー女性は、総じて自分の足で立つことに慣れていて、彼女たちは、幾世代もの間その訓練をされてきた。ジョンソン博士が、女性の雄弁は後ろ足で歩いてる犬のようだ、と言った時代に、彼女たちはまた演説に慣れていて、それがうまくなされたということは驚きではなかったが、それがなされたこと自体が驚きだった。

礼拝集会や彼女たち自身の事務的会合——当時は男性の会合とは別に行われていた——で女性フレンドは自意識なしに声を上げることを学んだ。彼女たちの直面したあらゆる問題に対する彼女たちの現実的な取り組み方は、クエーカー帽の下に柔和さのみを予期していた人たちを、おそらく驚かせたであろう。

「雇われ司祭」を廃止したフレンド派では、牧会的な指導と励ましは必然的に普通のフレンドによってなされなければならなかった。国内のあちこちに孤立した小さな集会が分散していたので、これらが会派としての命脈を保つためには定期的に訪問されなければならなかったし、調査の必要な不従順なフレンドや、問題を抱えていて、助けや慰めを必要とする人たちもいた。女性フレンドがこうした仕事の多くを行い、よほど風変わりな貴族の女性を別とすれば、他の女性が知ることもない自由をもって、その任務を果たすために旅をした。

彼女たちは夫たちの厚意と支持なしにはこれをなしえなかったであろう。それは、19世紀初頭においては際立った男性の態度を示すものだった。非常に貧しい工場作業員か農場労働者以外の男性で、妻が自分の家の壁の外の仕事につくことを奨励する人はまずいなかった。そしてその時は、深刻な金銭

的な必要だけが、そうした行動を正当化したであろう。

しかしクエーカーの女性は夫たちの祝福を受けて旅に出た。のみならず、男達は妻の不在の間子供たちの面倒を見ることを厭わなかった。セーラ・ラウントリーがロンドンに行った時には、一歳の息子を子守り女中に預けていったが、明らかに彼は父親と多くの時間を過ごした。「可愛いこの子はいつも健康で元気に恵まれている」と先代ジョーゼフは彼の妻に書いた。「彼は本当にいい子だ。暖炉用鉄具にあこがれの目をむけるが、触ろうとはしない。彼の最大の喜びは中庭と店に入ることだ。育児室は気に入らない。静かすぎる」。

多分長い目でみれば、こうした独立心のある女性の夫と子供たちは、彼らの享受した珍しい自由から恩恵を受けた。彼女たちは家族に共通の関心事に貢献する上で、世間話以上のものを持っていた。彼女たちは大舞踏会や、華やかなドレスとか、デリケートで入り組んだ社会的地位の向上などにはまったく無関心だったが、少なくとも彼女たちの趣味は、年齢に拘束されなかった。人生の終わりまで彼女たちは、婦人帽ではなく自分達の魂の手入れをすることができ、そして、時には他人の魂の手入れもすることができた。

彼女たちは、もちろん、すべてが聖人ではなかった。いつの時代にも言葉のきついボス的な女性がいた。先代ジョーゼフは手紙の中でハナ・バックハウスという人に言及してこう書いている。「(彼女は) ウェストモアランドの季会に出かけたが、そこで彼女がみんなにどのように受け入れられるかわからない」。しかし、全般的に、彼女たちの人との接し方は機転が利き、説得的であった。そして、彼女たちの奉仕が、多くの孤立した小さいフレンドの集団を完全解散から救ったことは疑いない。

セーラ・ラウントリーは、その全ての能力にもかかわらず、子供達には優しい印象を残した。彼女は家庭内の専制君主ではなく、本当に謙虚な性質を備えていた。彼女がどんな類の会合でも話をしなければならなかった時は、常に自分のことばが退屈で興味を失わないようにと祈った。そして、ペーブルメントでの多忙な家庭生活のさなかでも、子供たちにとってより楽しい仲間でありうるために、お絵かきのお稽古の時間をつくった。

彼女の天性にはもう一つの面があった。彼女は神に献身した人だった。彼

女の信仰は、子供達の批判的な精神に信心家ぶってるというような印象をまったく与えない高度なものだった。ジョーゼフは長い生涯の間、何千回と礼拝集会に出席したが、沈黙を破る気になることはめったになかった。しかし、ある時、ヨークの集会でやや激しやすい訪問者が、回心の瞬間は主の力を感じたすべての魂に知られていると宣言した。ジョーゼフは起立し、こう言った。彼の母は「彼女の」回心の時間についての記憶をもたないが、聖人というものが存在するなら、彼女がまさにそうだ。これが集会において彼の唯一の記憶されている発言だった。

「僕らは、午前と午後に、ペープメントを見下ろす三階の小さな部屋でいつも授業を受けた」とジョーゼフは子供時代の話をしている。「僕らは、朝食と昼食を父、母、店の若者たちと一緒に食堂でとった」。

店の若者たちは、ラウントリー家の男の子たちの生活において重要な人々であった。時々、彼らはねだられて朝食前に子供たちを散歩に連れて行ったり、ある時は、子供部屋で非常に大きな嵐が作られたときに、若者の一人はカウンターでの仕事を離れて、それを飛ばすのを手伝うことを許された。また、もう一人の、化学と機械学の好きな徒弟がいて、この人は店の仕事時間にラウントリー家の最年長の子供、ジョンと一緒にこれらの勉強を続けることを許された。

徒弟たちがジョーゼフの父のため、初めて働きにやってきた時、通例、まだ13歳か14歳の少年だった。彼らは家の子供達をからかったり、おもちゃを修理したりしたが、時には子供たちに困らされた。ラウントリー家で人気のあった遊びの一つは、母親が見つけて止めるまでだったが、徒弟のビーバー帽を階段の下に蹴って、途中の段にさわることなく、どれだけ遠くまで達するかを見ることだった。

それは決してまじめ一方の世帯ではなかったが、聖書の講読が朝食後いつもなされ、ジョーゼフと兄弟たちは、毎日、聖書の一節を学ぶことを義務付けられていた。家族祈禱は、フレンド派でなくても家庭内の日課の一部として受け容れられつつあったし、責任ある男たちは、家庭祈禱を彼らの家に住む人々に対する自分達の義務と見なし始めていた。

ジョーゼフの父は、彼のすべての責任を真摯に受けとった。彼は自分の事業については心配しなかったけれど、他の多くのことがいつも彼を悩ました。彼は徒弟たちの身体的、精神的な健康に心をくれた。彼が奉仕した教育委員会——これはヨークとアクワースの二つのクエーカー学校を管理した——は、彼にとって多くの心配の種だった。彼は時として、彼の三人の幼い息子たちがエネルギーのはけ口もほとんどない店の階上の狭苦しい部屋で育って行くという現実によって悩まされた。彼はこれを改善するために出来ることを行った。

「僕らを与えられた大工道具を持っていた」ことをジョーゼフは覚えている。「そして僕らは植物採集を奨められた。僕は蝶と蛾の採集をした。時々、夏の暑い日に、女性家庭教師が、コンマ蝶やその他の珍しい昆虫のいるラングウイズの森に僕らを連れて行ってくれたものだ。…僕の兄のジョンは雲雀の骸骨を作ろうと試みた。彼は、時が解剖学者の仕事をしてくれるだろうと期待して、死んだ鳥を屋根に吊るした。しかし、この実験にからんだ公衆衛生法違反がその時期尚早の放棄に至らしめた」。

言い換えると、セーラ・ラウントリーがひどい悪臭を突き止めて、その死骸を処分したのである。彼女は長年にわたって辛抱させられ、またそうしなければならない女性だった。三人の潑刺とした幼い男の子たちが元気一杯、活気に満ちた生活をしている子供部屋で見つけたのは雲雀の死骸だけではなかった。しかし彼女は、あの人は七人の子供を育てたが、声を張り上げたこともないし、ほとんどどんな状況にあっても平静さを取り乱したことがないと言われた、あるアメリカ人のフレンド会員と多くの共通点をもっていた。

ジョーゼフは次のように言う。「僕らの簡単な化学実験の一つはガスの製造だった。小さな石炭をタバコ・パイプの火皿に入れて、パテでふたをした。これを火に入れるとまもなくガスの小さな流れがパイプの口から出てきた。もう一つの僕らの好んだ時間の過ごし方は焼き石膏の鋳型から電気型を作って、コインのゼラチン刻印をとることだった」。

三人の少年がパテ、焼き石膏、ゼラチン、大工道具を放り出していったあとの部屋の状態は彼らの女性家庭教師を喜ばせはしなかったが、彼女の抗議は大して効果なかった。ジョーゼフは思い出して言う。「父は、女性家庭教師

たちの僕らの扱い方にどれだけ疑問をもっていたにせよ、彼女たちにはいつも親切で丁重だった。僕らは子供としてこのような疑問をまったく知らなかったし、父母は女性家庭教師のすることにはすべて同意していたと思っていた。」

彼らはいつもほとんど女性家庭教師の手に負えなかった。ペーブメントの家には子供たちを子供部屋に閉じ込めておいて、ティーの後居間に連れてくるという決まりはなかった。授業の時間を除くと、彼らはいろんな人が混ざった世帯の一員として暮らし、両親の業務を分担し、店内で起こっていることのすべてについて、徒弟たちから断片的に集めた、かなり包括的な知識をもっていた。

先代ジョーゼフは、心配症だったかもしれないが、記憶に残る父親だった。彼はとても楽しい、ごたごたした実験材料を提供したというだけではない。幼少時に、病気で、あるいは叱られて、眠れずに横になってるとき、夜のある時刻にベッドの脇にたたずむ父を見なかった子はいない。

「彼がそこにいるというだけで大いなる慰めだった」とジョーゼフは言う。

家族はジョーゼフが九歳になるまで店舗兼住居に住んだ。この時期にさらに二人の子供（ハナが1840年に、セーラ・ジェインが1843年に）が生まれたので、より大きな家への引越しの問題がよく話題になった。しかし、先代ジョーゼフはペーブメントを去りたくはなかった。家族みんなと同じように、彼はこの家に、その欠点にもかかわらず、大いなる愛着を持っていたのである。おそらくまた、ますます多くの富裕な事業家が事業から離れて郊外の壮大な邸宅に引っ越していたが、彼らに加わることを不本意とする、無理からぬ気持ちだが、彼にはあった。しかし、ついに五人の子供たちの要求が、彼のしりごみを抑えた。1845年、家族はシティー・ウォールのすぐ外のブロッサム通りの家に引っ越した。

徒弟たちの世話をするために、ある夫婦がペーブメントの家に住み込んだが、先代ジョーゼフは相変わらず昼食は彼らと共にし、日曜日の夕方には、彼がいつもしていたように大きな声で彼らに朗読した。彼らはしばしばブロッサム通りの家に食事に招かれたので、ラウントリー一家と従業員の間の

つながりはけっして断たれはしなかった。それでも、店の階上の住居での古い家族生活とまったく同じでとはいかなかった。「若い人たち」への責任は先代ジョーゼフに、かつてないほど重くのしかかった。

ブロッサム通りでは、ラウントリー家の子供たちは生まれて初めて庭で遊べるようになり、母親は店の便宜のために砂糖の袋を台所に置かなくてもいいようになった。彼女の家事の状況は今は以前より全体的に楽になった。男の子たちは通学生として学校に行き始めた。

ヨークのフレンド派の学校は、ジョーゼフが最初に生徒になった時に、新しくローレンス通りからブーザムに移転した。ジョーゼフは11歳で、青い目と非常に黒い髪という珍しい取り合わせをもった、体格のいい少年だった。彼は、クエーカー教徒の間で習慣だった「質素な服装」の男子生徒版を着た。それは、きっちりとボタンの掛かったチョッキを見せるように裁断された黒い上着と、ほとんど肩までおおうほど幅の広い衿をもった白シャツであった。「町の少年たち」は、衿の幅以外は彼ら自身の衣服と大して違わないのに、この服装をからかった。そのからかいは、ジョーゼフと兄のジョンの登下校の際に、時としてほとんどいじめになることもあった。

しかし、ひとたび学校内に入ると、彼らは自分の家と同じくらいに打ち解けた雰囲気の中にいた。校長先生は彼らの父親の旧友で、少年たちの多くは小さいときから彼らとは知り合いであった。彼らは落ち着いて、快適にペーブルメントの子供部屋で始めたのと同じ趣味を追求した。

ジョーゼフの第1学期は百日咳の発生で中断され、彼とジョンの二人とも罹った。他の三人の子どもにも間もなく移り、末っ子のセーラ・ジェインは重症であった。彼女は12月19日に亡くなった。何年もたってから、ジョーゼフは、妹が埋葬された日の、父の顔の悲しみに打ちひしがれた様子をまだ思い出すことが出来た。

その年、ラウントリー一家はスカーバラの宿泊所でクリスマスを過ごした。転地療養が子ども達のためになると願い、そして、両親は、この時ばかりは「冬の季会の大騒ぎ」から逃れたことを感謝してることを認めた。それは彼らの心境を明かす告白だった。というのは、通常は二人ともフレンド会の業務集会には大いなる関心を持ち、こうした機会の一部でもあった友人や親類の

集まりを心から楽しんだからである。

### 第3章 ブーザム校時代

ジョーゼフはブーザム・スクールで5年間過ごしたが、この場所は彼に強い影響を与えた。それはどちらかというところ奇妙な教育施設で、ある面では進歩的、その他の面ではやや古風であった。フレンド会の子供たちと世間の誘惑との間に「垣根を置く」という伝統的なクエーカーの方針は18世紀の半ばまでに弱まってはいたが、ブーザムには古い習慣の多くがまだ残っていた。新聞の校内持ち込みは認められず、校長は到着する郵便物すべてを検閲し、どの生徒も自分の家族以外からの手紙を受け取ることを認められなかった。いかなる体罰もなかったが、「隔離して長時間着座」というのがあり、これは多くの子にとって、きつい鞭打ちよりもひどいと思われた。

しかし、他方では、知的好奇心にはいかなる限界も置かれなかった。校長のジョン・フォードが探求を恐れるテーマは全くなかったし、生徒に禁じられた問いは存在しなかった。その基礎が岩盤に根ざす人のみが、敢然と未知の世界に向かうことが出来た。彼の勇気は、後年、生徒たちの父親たちが退いた世界が、生徒自身がそこに生き仕事をする世界になった時に、彼らを大いに助けることになる。ジョン・フォードは、自分自身が決して通り抜けようとはしなかった扉を他人のために開いた。

彼もまた、スケールの大きな人格に備わる——伝説の素材となる——いくつかの見事に矛盾した面をもっていた。彼は寛大でもありえたし、激烈でもありえたが、決して反応が鈍いということではなかった。彼はラテン語とギリシャ語が重要な教科と信じ、それらの最良の教え方について見解を述べた。しかし、彼はまた科学を学校のカリキュラムに採り入れた。ジョン・フォードのほとんどの現役時代を通して、教育界では科学教育についての議論が盛んになされたが、彼はそれに気づいていなかったようだ。そして、勿論、彼の方針が学校の委員会によって疑問視されることは決してなかった。新しい科学的発見によって挑戦されるクエーカーの信条はなかった。

ジョーゼフの時代に学校を構成した45人か50人の少年たちにとって、校長

は疎遠な人物ではなかった。彼らは、ペープメントの徒弟たちが先代ジョーゼフの家族であったと同じ意味で彼の「家族」であった。さらに、彼は各少年の教育の大部分は校内よりも校外において、より強力になされると信じて、教職員が生徒たちにとって親しい仲間であることを求めた。

その生まれも育ちもジョン・フォードは閉ざされたフレンド会の会員であった。また、彼は大学の経験もなかったし、他の教育者たちとの接触もほとんどなかった。しかし、それにもかかわらず、彼は過去にではなく未来に向かった校長の一人であった。彼が生徒達に課した全ての小さな制約にもかかわらず、彼らは、その言葉のもっとも広い意味で、進歩的教育を受けた。

その当時は気付かなかったが、ブーザムの校長はラグビーのアーノルド博士とほとんど同じ目的に向かって仕事をしていた。彼らは会ったこともないし文通したこともないが、博士が亡くなり彼の手紙と説教が出版された後、ジョン・フォードは非常に孤独な道の旅人の高揚した気持ちをもって、信条と階級のすべての違いにもかかわらず、彼らは神と学校生徒の両方の本性について合意していたことを認めた。その後は、彼は生徒たちによくアーノルド博士を引用し、一度はラグビー訪問の特別な旅行をした。これは、すべての司祭を信用しないように育てられた人からの、特別な敬意の証であった。

ジョン・フォードの風変わりで力強い人格の指導のもとに、若いジョーゼフは大きく成長した。彼は探究心をもっていた。好奇心が罪とはされない学校に送られたことは彼にとって大きな幸運であった。彼は博物学会に入ったが、これはイングランドにおけるこの種の最初の学校組織であった。彼と彼の兄のジョンは二人とも博物学の小論文で賞をもらった。彼のその他の学校の成績については記録が残っていない。筆記試験は彼のブーザムでの最初の年に導入されたが、これは明らかに現代のように畏怖と究極性をもっては重要視されなかった。彼がクラスのトップか、あるいは最低に近かったのかを告げるものは何も残っていないが、彼の学校教育の真の価値はおそらく、彼の全生涯における非常に広範で多様な内容の書物を読み、楽しむ能力によって測られるであろう。彼はまた学者の記憶力をもっていた。老年になってからでも彼は通常すぐに図書館で彼の欲するどのような本でも手にし、特定の参照個所を見つけることが出来た。



彼の学校時代に、生涯の最後まで彼の思考に影響を与えた、ある出来事が起こった。それは、アイルランドのじゃがいも飢饉の惨事を見たことであつた。

この特定の時期に、先代ジョーゼフが二人の息子たちをアイルランドに連れて行ったのは少し不思議に思われる。ジョーゼフは14歳、兄のジョンは16歳だった。彼らは植物採集用の箱と日誌を持って行くように言われ、これは休暇旅行とされてはいたが、父親は、飢饉に襲われた農村地帯において、彼らが必然的にいくつかのあまり愉快ではない飢餓の例を見るであろう事をわかっていたに違いない。それでも彼は、子供たちを連れて行った。校長のジョン・フォードがこの一行の四人目のメンバーだった。二人の大人たちは、救援活動を開始する目的で、最悪の地区の状態を調べるようにフレンド会から多分何らかの委任を受けていたように推測される。

この3週間の旅の記憶は、ジョーゼフの心に死ぬまで残った。彼は、死んだ赤ん坊をしっかりとつかんで道端に座っている半死半生の女たちを見た。何マイルも運んだが売れなかった泥炭籠の傍に横たわって死にかけている男たちを見た。棺に入れられず、また、どこの誰ともわからない死人が、他に何も出来ないほど弱った人たちによって壕に横たえられているのを何箇所かで見つめた。日誌をポケットに入れ、標本を手にしたこの生徒は、目撃し記憶した。それは彼の貧窮との最初の出会いであり、彼の生涯における画期的な事件であった。

もちろん、ヨークにも貧困はあつた。ペープメントの店の角をまわった所にむさ苦しい路地と中庭があつて、そこではぼろをまとった女たちと裸足の子供たちがひどい生活をしていた。しかし、ジョーゼフは彼らが餓死して行くのを決して見たことはなかつた。ヨークには「スープ・キッチン」(これは彼の父がその開始を手伝った)があつて、貧しい人々はそこで日に一度、かろうじて生きていくに必要な栄養を得ることができた。若いジョーゼフが、スープが本当に貧困への回答なのかと疑い始めたのはおそらくアイルランドでのことだった。

1840年と1850年の間で、知的で啓蒙化された父親の子供ならば、貧困はイングランドの人口の半分の運命であつた、という知識から逃れることはでき

なかった。フッドの‘シャツの歌’が「パンチ」のクリスマス号に載った。コブデンとブライトは穀物法の廃止を強く要求した。飢えた農場労働者たちが乾草を焼いていた。シャフツベリー卿は、工場における女性と子供たちについての信じがたい統計を出していた。しかし、聞くことは見ることは異なる。ジョーゼフは田舎に住んだことはないし、農場労働者の小屋の中に入ったこともない。ヨークには工場はなかったので、眠むそうで発育不良の子供たちが、彼らの信じがたい労働の行き帰りに辿る道は、彼の経験にはなかった。彼が、直接に、正確に貧困と飢餓がいかなるものかを見たのは、アイルランドにおいてだけだった。彼はそれを決して忘れなかった。

ジョーゼフがまだ学校に通っていた時に、ラウントリー家は再び引っ越した。彼らはブロッサム通りからブーザムの家に移った。ジョーゼフと弟ヘンリー・アイザークは今ほど短距離を歩くだけで登校した。ジョーゼフの余ったエネルギーは陸上競技に向けられ、彼は学校の運動場での100ヤード平地競争で勝った。それは彼が学校時代の終わったしばらく後まで、自慢の手柄だった。しかし、彼は足を骨折したので、最後の夏のクリケットには出場できなかった。「あまりにも心が昂ぶり」、彼はホブ・モアの幅広い溝を跳んで、落ちこちた。言い伝えによるとこの跳躍は長さ21フィート、下降8フィートだった。後に何世代もの生徒たちはこれを「ジョーの跳躍」と呼んだ。これが彼の学校時代の終わりだった。再び歩けるようになった時には夏の学期は終わっていた。彼は兄のジョンに続いてペーブメントの店に入った。

#### 第4章 徒弟時代

ペーブメント店の心臓部は会計室だった。それは先代ジョーゼフの私室であり、彼はそれを非常に居心地よいものにした。そこで仕事をするばかりでなく、友人をもてなした。ジョーゼフが覚えている限りでは、「父とその客」のための快適な椅子があった。コーヒーを炒る器具が会計室に置かれていて、それで茶の湯を沸かすことも出来た——お茶を飲むことは今と同様に百年前も事務所生活には欠かせないものだったようだ。そこにはまた先代ジョーゼ

フとジョンが共同に使用していた二人用の大きな机があった。その上には古い請求書や送り状がどっさりと積んである棚があった。これらの棚は、いささか奇妙なことに「デービッド・プリーストマンの衣類」として知られていた。というのは、かつてこの若者の所有する衣類の包みが非常に長い間そこに放置されていたからであった。古い住所が求められた時に、「デービッド・プリーストマンの衣類を見なさい」という叫びが会計室でよく聞かれた。

会計室と店の間には窓があったので、先代ジョーゼフは起こっていることすべてに目を遣ることが出来た。ある時は、在庫品が隣室に置かれていたが、その部屋の唯一のドアは彼の机の脇でしか開かなかった。しかし、これはあまり便利な配置ではなかったのも、まもなく変更された。多くの私的な会話がこの先代ジョーゼフの聖域でなされたが、干しぶどうやコーヒーを店に追加補給するためにやってくる若者達によって、かなり邪魔をされた。

若いジョーゼフは父の徒弟として働いた。彼は寝るために家に帰ったが、他のすべての点では店の所有者の息子に何の区別もされることはなかった。彼は他の若者と同じ規則に従い、同じ仕事をした。その規則は注意深く考慮されたものであり、先代ジョーゼフが1852年に書いた「覚書」の中に、今でも残っている。それはおそらく自分の息子を彼のもとに託そうと望んだ人たちに送ったもののようだが、この家庭に入って来る「新人」たちのための案内書としても役に立った。

「ペーブメント店舗施設の目的は**商売**である。職人として、或いは徒弟としてそこに入る若者はこの商売を助けるべく雇われ、これを成功さすべく貢献することが期待される。勤勉で聡明な若者が、茶と食品業について、商品の購買から簿記を含む、実践的な知識を獲得する上でのあらゆる機会が与えられるよう手配される。送り状、売上勘定、商品原価、等を自由に見ることが出来る」。

「しかしながら、ペーブメントでの仕事の価値は、主としてそこに入る人の気質と心構えに依存することが理解されるべきである。それは勤勉な人には学ぶ上でのいい機会を与えるが、じきじきの商売伝授はほとんどない。ここは怠け者と気まぐれ者には**向いてない**」。

「大家族にあっては、各自の起床時間等の厳守は大切である。さもないと、

無思慮な、或いは安逸をむさぼる個人が他人の時間を浪費する」。

「通常の場合、ペーブメント家族の半分しか一緒に食事できないので、多くの時間が食事に費やされることは避けがたい。商売を怠ることなく、思いやりと工夫によって食事時間の不必要な延長を防ぐために、多くのことがなされるであろう。食事時間の頻度、ならびに家族の仕事には総じて重労働は存在しないことから、各食事は約20分で十分であろうと考えられる。しかし、皆が集うこうした機会は、懇親と一致をもたらす性質をもつものであることが非常に望ましいので、厳密な所要時間を定め**ない**ものとする」。

「毎朝、店に入る際に、各若者は事務所の時計に合わせた正確な入店時間を、この目的のために置かれた帳簿に記録する。時間厳守の者には、毎年26シリングの祝儀が支給される」。

「12月と1月は、7時半に開店する。他の月は7時である。閉店は8時だが、市のある日の夜は例外で、その夜は10時まで開く」。

「若者の外出自由な時間は、6月と7月は10時まで、4月、5月、8月と9月は9時まで、その他の6ヶ月は9時15分前までである」。

「隔週の平日に、各若者が集会に出席できるように仕事を割り当てることとする」。

「各若者に年に一度、友人宅を訪問する機会が与えられる。若者一人一人が、洗面設備などのある個室を持つ。喫煙と火器所有を禁ずる」。

「家族があらゆる点で、衣服、言葉、等に関し、宗教的なフレンド会を特色付ける習慣や慣例を維持することを、私は心から願う」。

今では、店の時間は先代ジョーゼフが商売を始めた時よりは短かかったが、この規則はかなり厳格に見える。何人かの少年が課せられた制約に反抗した。先代ジョーゼフによって書かれた1、2通の手紙が、彼が時として「気まぐれで怠け者の」徒弟に悩まされたことを示している。しかしほとんどの少年達が彼らの雇用条件をまったく自然なものとして受け取っていたようだ。彼らは皆フレンド会員であり、おそらく家庭内の生活形態はラウントリー家とほとんど変わらない家庭で育った。その上、彼らは商業の世界で成功することを切望していた。そしてペーブメントの店は、今日よりも当時の方が、より困難だった商売を学ぶ上ですぐれた場所として知られていた。

若いジョーゼフが就職した時、食料雑貨商は、その商売で成功するのにかなりの技能と洞察力を必要とした。茶もコーヒーもブレンドしなければならなかったし、一般販売用の標準的な中国茶とインド茶のみならず、何人かの特定の顧客は自分自身のための特別なブレンドを要求した。ウーロン茶のような最高の茶でさえ、毎回の入荷ごとに変化がありがちだったので、いつも同じ結果を導くには精妙な味の識別力が必要とされた。

ラウントリー店の壁面の美しいマホガニーの鏡版にある棚や引出しに配置される商品のほとんどについて、同じことが言えた。販売してるバターには通常5つか6つの等級があったし、同じ時に同じ乳業会社から買ったチーズにすら差異があって、それに見合った価格を付けねばならなかった。地元の製粉所から来る小麦粉は毎年品質が同一ということはほとんどない。デメララとバルバドス砂糖の特大樽は、その中身が売られる前に、全部吟味されねばならなかった。

全ての在庫品の価値を査定するのは食料雑貨商の業務だった。どこで買われてもその標準が保証される専売品はごく少なく、主婦たちはほとんどまったく地元の商店主の判断に依存した。彼の商品は満足の保証として彼自身の名前を携え、彼の名声はもっとも厳密な意味で、彼個人のものだった。後年、彼自身の商品の品質に関してほとんど熱狂的になる若きジョーゼフは、ペーブメント店の磨き上げられたカウンターと倉庫の間で働いた日々に、自分の標準を身につけた。

ジョーゼフが学校を卒業した後、はじめて一緒に働いた少年たちについて、われわれはわずかの事しか知らない。彼がペーブメントで生計を稼ぎ始める3年前——「1849年の3月」に——「ヨーク兄弟会」が結成された。これはたいそうな名前だが、実際には単に「ヨークのジョーゼフ・ラウントリー家に逗留していた時に会員間に存在した友情と関心を持続するために」形成された小さなクラブであった。

この会は以下のことを決めた。

〔(1) 1860年6月13日正午にヨーク・ミンスターの階段で会う。

(2) 各会員は、毎年、6月30日までに、その年における自分の行動の報告

を書き会長に提出する。

(3) 会長は全兄弟会の行動報告を書き、各会員に送る。」

これらの「行動」というのは、生きるために世に出て行く若者たちから予期されうるものである。ジョージ・パンフリーは1850年において最年長の徒弟だったが、その弟トーマスは同年に最年少の徒弟だった。二人とも1854年にニューカースルに行き、老舗の家族食料品店を引き継いだ。トーマスは兄弟会へこう書いている。「コレラが何百人もの命を奪った。そして、以前この店を経営していた若い男が、われわれの店から数軒先に開店し、多くの古い顧客を奪っている。しかし、希望せよ。つねに希望あれ！」。

ウィリアム・ヒューズは1850年にペープメント店における「お茶部門の責任者」の位置をしめた。1851年には彼は職場主任だった。次の年に、彼は職場兼住宅に住み、先代ジョーゼフの親類の一人、レイチェル・ラウントリーと共に他の徒弟たちの世話をする責任を担った。1854年にウィリアムは「古い町におけるわれわれのクラブの最後の者」だった。そして彼は翌年に情勢の変化について報告することが期待された。

若者の幾人かは、南や西へ、バースやブリストル、ディバイデスへ行った。彼らはその成功や困難について、客を惹きつけるために店に板ガラス窓を付けることについて、「一人の**非常に**小さな少年を、市の日にはもう一人を」雇うことについて、非常に強く下線を引いた上で、**一時的にだけだが**、家政婦を雇うことについて語っている。

彼らのほとんどは結婚し、残っている人たちに同じように結婚することを勧めた。ほとんど全員が1860年6月にミンスターの階段での約束を守る堅い決意を表明している。先代ジョーゼフは兄弟会について聞き知った際に、その日に彼らが彼と食事を共にすることを希望した。しかし、彼は兄弟会の会合の日がめぐってくる前に亡くなった。そして彼らの行動の記録は1859年で終わっているのです、正午に何人がミンスターの階段に集まったかはわからない。

ヨーク兄弟会は1860年以降に解散したが、それは会員が各地に散り、大人になっていたのです、自然であり避けられないことだった。しかし、その存在

は徒弟たちが商売だけでなく共同体に属していると感じさせようという先代ジョーゼフの野心の成功を証明するものだった。彼らの自由時間は今日の基準からすれば制約されてはいたが、明らかに孤独ではなかった。彼らはやはり一つの「家族」であった。

若いジョーゼフは、かつて学校を卒業した時の自分を「非常に未熟な若者」と記した。彼は生来内気だったので、年長者の間ではしばしば口をきかなかつた。しかし彼の父は会話に関して天賦の才能の持ち主で、ペーブメントの食卓は「少年でさえ興味を覚えた」とジョーゼフは言う。「出席した若者たちは時には会話を持続することにあまり慣れていなかったが、父はいつも、何であれ彼らが持っているものを引き出すことに成功した」と、彼はつけ加える。

さらに、先代ジョーゼフは人びとが秘密を打ち明けて相談するような人だった。彼は議論の弱点に対してきわめて透徹する眼をもっていたが、直観的であり、思いやりがあった。これは、「時として、助言を求めに来る人をがっかりさせた」と言われた。もちろん、何かを隠していたり、事実を自分の都合のいいように操作しようとしている人には、先代ジョーゼフの助言を求めるのは無意味だった。にもかかわらず、公的な事柄を相談するためのみならず、個人的な困難についての助けを求めに、多くの人が会計室に来た。ジョーゼフが学校を出た次の年に、彼は市の長老参事会員に選ばれ、それからペーブメントの店への来訪者の数はさらに増えた。会計室内では、ラウントリー倉庫のすぐ裏を流れる悪臭を放つフォス川の排水について語られ、市内の蒸気機関の使用について、その煙の害について議論がなされた。そして、いつも、当然ながら、フレンド会に関する事柄について話にくるクエーカー教徒がいた。

先代ジョーゼフがクエーカーの結婚規則を変えようと試みたのはこの時代だった。幾世代もの間、フレンド会は他の宗派の人と結婚した会員を、絶縁してきた。フレンド会員の心の中には、こうした結婚について二つの反対理由があった。その一つは、単に「外で結婚する」ことで、「宗旨を異にする二人の結婚」には多くの困難が予期された。もう一つの反対理由は、二つのうちでより強い理由だったが、「司祭の祝福による結婚を基本的に認めないク

エーカーの立場だった。しかし、フレンド会員は、会則により、集会において会員でない人と結婚することは出来なかったので、「外で結婚する」ことは、どこかの教会の聖職者による結婚を意味した。これが会による最大の糾弾を被った。

ある人たちは、場合によっては、規則に反して結婚した後ですら会員として復権させられた。しかし、それにもかかわらず、絶縁の慣行は会全体にとって自殺的慣行だった。19世紀の前半において約5千人のフレンドが会員権を奪われた。それにもかかわらず、先代ジョーゼフが規則変更の必要性を力説し始めた時に、仲間のクエーカー教徒たちの間で、非常に強固で保守的な頑固さに出くわした。

しかし、彼を支持した人たちもいた。そうした人のなかにジョン・ブライトがいた。ブライトは、心から愛していた妹が結婚した時に、フレンド会から絶縁されるのを見た。そして、先代ジョーゼフが規則を変更させようと試みていることを聞いたときに、公私にわたって、彼の力の及ぶ限りのあらゆる支持を与えた。彼が店に現れるといつもカウンターの後ろにいた若者達は興奮した。彼らは穀物法を廃止させることにより歴史を変えたこの人を畏怖をもって見つめた。

ジョン・ブライトは若いジョーゼフの英雄の一人だった。彼らの間には25歳の年齢差があったが、彼らは多くの理念を共有していた。ジョン・ブライトはアイルランドの状態を非常に憂慮していて、彼の国会演説や記事の中に、ジョーゼフは自分自身が目撃した悲惨の記述を見出した。また彼には、多くのフレンド派の人たちが不信感を持った、芝居がかった性格があったが、しかし、これが青年たちに強く訴えた。クエーカー集会における彼の存在は必ずしも長老たちの「純粋な満足感」の源泉でなかったにせよ、いつもフレンド会の若いメンバーを奮い立たせた。「彼の会話と態度は大いなる力の印象を与えた」というのが19歳のジョーゼフの意見であった。

3年間で波乱なく過ぎた。この間、ジョーゼフは商売を学び、父親の客と語ることを学び、父の蔵書を耽読した。家族は再び、そして最後の引越しをした。ブーザムとセント・メリーの角の、先代ジョーゼフが引退用に建てた



大きな家に落ち着いた。それは美しい家ではなかったが、広々とした家であった。男の子が閉じこもって読書する部屋が沢山あったので、ジョーゼフは膨大な読書をした。彼は、歴史、哲学、ジェーン・オースチンの小説を読み、当時の英語世界を震撼させた2冊の本、ダーウインの『種の起源』とジョン・スチュアート・ミルの『自由論』を読んだ。彼は自らの基礎を築いていたのであった。

## 第5章 ロンドンでの日々

ジョーゼフの祖父は18世紀の末に、フレンド派全会の代表者集会である年會に出席するためにスカーバラからロンドンへ馬に乗って行った。彼の父は1820年代と30年代に、同様の場合にハイ・フライヤー・コーチ（馬車）でヨークからロンドンへ行った。ジョーゼフは1855年に汽車で行った。彼は父と兄に付き添われて行ったが、ちょうど19歳だった。彼は、その気質と訓練からほとんど可能な限界まで興奮した。彼と兄は非常に小さい時からすべての旅行の際に、日記をつけるように父から勧められていた。ロンドンへのこの旅行のために、ジョーゼフは美しく、分厚い、青い罫の入った、しっかりと装丁された小さな帳面を準備した。

この旅自体にいろいろなことがあった。

若いジョーゼフは記す。「グランサムに停車した時、ある婦人が…父にかなり真剣に「タイムズ」を見せてくれるよう頼んだ。彼女は急いで死亡欄を一瞥し、車両の隅に引っ込み、抑えきれないほど激しく泣き出した。やや落ち着いてきた時、セバストポール前の塹壕で戦死した彼女の兄の死亡記事を指した。」

ラウントリー家は年會に出席するために来て、どの会合にも出た。しかし、最初の会合が始まるまでにまる2日間あったので、この2日間ジョーゼフは観光に行った。彼はマダム・タッソウに行った。（「像は生きてるみたいではあったが、僕が予期していたほど真に迫るものではなかった。」）彼はテムズ・トンネルと動物園に行った。動物は健康的で、快適に見えた。彼はとくに魚を感心して見た。

年会のさなかでも、懇親の楽しみの時間もいくらかはあった。ラウントリー家とパンフリー家は、サムエル・ガーニーが親切に送ってくれた馬車でハム・ハウスを訪問した。

ある日曜日の午後、ジョーゼフ・J・リスターとのお茶に行った。そこで若いジョーゼフは、またジョン・ブライトに会ったが、彼はこの時、クリミア戦争への反対のために、極めて不人気だった。にもかかわらず、ジョーゼフは彼が「大いなる反対の間にも、激励する人たちもいた。個人的には知らない30人の政府高官が手紙を書いて彼の行動にたいする賛意を表明した」と言うのを聞いた。

クリミア戦争は、1855年のデボンシャー・ハウスでの年次集会の会合では長時間にわたって論じられることはなかったが、ジョン・ブライトは、国会議員の間でとほとんど同じくらい強く、彼の存在をフレンド派の人々の間でも認めさせた。

ジョーゼフは、ブライトが「あまりにも多くの権限がロンドンにあるフレンド派の組織に集中していることに大いに反対した」と記している。他の会合ではフレンド派がその死者のために教会によって埋葬地として聖なる場所とされていない特別な土地の一面を取得する件について大いに語った。ジョーゼフはブライトの演説を次のように報告する。

「彼の属している規模の集会のために土地の一面を買って、そのまわりを壁で囲むのはかなりの出費であった。埋葬は年に三回以上はなかった。取得して壁で囲んだところは死者の安息の地よりも牛の水飲み場のように見えた。しかし、彼が心中、他のいかなる考慮以上に考えたことは、あまりにも多くの宗派的な相違で世間から隔てられている、われわれのような会では、死においてこうした相違を埋めるのはよいことということであった。生涯にわたる葛藤と苦闘の後に、一つの共同の安息地で出会うのはよいことであった。」

こうした感情は、一般的には人気があり得なかった。ジョーゼフはコメントなしに記録しているが、彼の共感がどこにあるかは明らかであった。年次集会の終わり頃に、ジョン・アランが「フレンド派の人々が、**庶民の家**(訳注：ジョーゼフは正式には House of Commons 庶民院と書くのをあえて小文字を使ってイタリック体で *house of commons* = 庶民の家と書いた) においてであれ、どこであれ、

平和な態度で平和の原則を説くことを**望んだ**」と彼は記している。彼は今や英雄を知った。平和的な方法という言葉は、フレンド派の人々に一般的に理解される言葉としては、ジョン・ブライトの気質に属さなかった。彼は、フレンド派が信用しなかった力強さで平和を訴えたのであった。

ジョーゼフはロンドンの光景と音で満たされた心で、ヨークに戻った。シティーが彼の想像力を捉え、もっと詳しく知りたかった。どのようにして彼がロンドンに住み、働くように父を説得したかについての記録はないが、自分の郷里を越えた世界の何かを見ることを渴望する若者の議論は、どの世紀においても異なるものではない。疑いもなく、今や彼の徒弟時代はほとんど終わり、父が彼をパートナーとする前に、彼が他の食料品業務の直接的な経験をもつことは、自分にとってもペーブメントの店にとっても有利なことと、——まったく正しく——指摘した。若者が自らの商売の知識をこうした仕方  
で洗練するということはよく行われていた。後年、偉大なボーンヴィル工場を建てることになるジョージ・カドベリーは、ジョーゼフがまだそこで徒弟をしていた時に、ラウントリーの店で2年間店員として働いた。

ジョーゼフは望む道に進んだ。1857年2月に、彼はロンドンに居を構え、シティーにある大きな食料品問屋で働いていた。彼は父にこう書いた。

「僕は通常、8時半頃フェンチャーチ通りに着きます。午前中は仲買人たちが頻繁にお茶の見本を持ち込んできます。僕はそれを在庫品と比べて飲みます。同様に、コーヒーの見本を焙じ、挽き、湯を注ぎ、試飲します。焙煎は、完全を期そうとすると、非常に微妙な作業です。あらゆる機会を捉えて自分の技能を増やせることを嬉しく思います。

僕はよく社員の一人に付いて税関や、埠頭や銀行に行きます。僕はだんだん簿記の体系を理解し始めてます。

僕はまた、われわれが関係する仕事の現場で新しいことを学べそうな所を見学するつもりです。砂糖の精錬所も見たいし、ウエスト・エンドの第一級の食料品店も訪問したいと思います」。

先代ジョーゼフはこの手紙を見て微笑んだかもしれない。彼自身、コーヒーの権威とみなされており、1853年に時の大蔵大臣のグラッドストーンにチョコレートと混合したコーヒーの販売に関する技術的な点に関して諮問されたこと

があった。しかし彼は寛容な人だった。彼は若いジョーゼフが、すべてのまともな考えのある若者なら年長の人というのは狭量で旧式な人とみなす年齢にあると理解した。彼はやがて、ペープメントの店は田舎からくる市の日の客の需要を非常によく知っていて、ロンドンのウエスト・エンドの食料品店から学んで役立つものはほとんどないことを発見するに至る。

一日の仕事が終わり、大変な気遣いで管理する必要のある薪で熱する大きなコーヒー焙じ器が洗浄され、冷却されると、若いジョーゼフは国会下院の傍聴席に出かけて行った。

当時はグラッドストーンとディズレーリの対立の初期で、政治に興味ある若者にとってその討論は、しばしば感動的な映画が今日の青年に与えるのと同じくらいの劇的效果を与えた。

ジョーゼフはディズレーリには好印象を持たなかった。「彼の発声はためらいがちで、——彼の議論はあまり明晰でなく——彼の才気縦横さが発揮されるのはいやみを言う時だけのようで、——彼の議論は党派心に満ちているように見える」。

この批判は、1857年2月21日の予算討論の記述に出てくるものだが、ジョーゼフがロンドンに来てまだ3日間しか経っていなかったのも、多分、それは彼の最初の下院訪問であったのだろう。

彼は続ける。「ディズレーリの後をついだのは哀れな大蔵大臣だった。彼は下院ほど詳細に関心を持たない聴衆ならうんざりするような返答をした。彼は、われわれが“支払い済み請求書”と記して店の引出しに置いてるのと同じような紙の束を手にしていて。彼はこれをひっきりなしにめくって、正しい紙を捜しているようだったが、彼の演説の難儀は、捜している紙を見つける難儀に劣らないぐらいのようだった」。

この若い食料品問屋の店員は、演説に関してはいわば玄人筋だった。何年間も、彼は議会報告書を読み、父が朗読するのを聴いていた。さらに彼はフレンド会で育ったわけだが、この会の人たちは演説の仕方については寛容ではあったが、公的な発言内容に関しては優れた批判的認識力をもっていた。

この討論においては、グラッドストーンだけがジョーゼフの標準に達した。「それは、僕が思うに、今まで聴いたうちで最良の雄弁だった。」と彼は言う。

「彼の以前の演説の力を削いだと言われている詳細に入りがち傾向は今ではなくなった。しかし、彼の演説に最も力を与え、ディスレーリと強く対照をなすのは、彼の明らかな誠実さと真摯さであった。この時僕にとって印象的だったのは...いやみをほとんど使わないことであった。」

下院は相変わらず面白かった。予算討論後一週間して中国の問題があった。広東が、熱狂的な在香港英国公使の命令で爆撃された。この公使は不幸なことに発砲命令を下す前に事実を確認しなかった。公使が間違っていたことには議論の余地はなかったように見えるが、政府は、コブデンが国会で攻撃を非難する動議を提出するまでは、この公使を譴責する気はないらしかった。

コブデンは、10年前の穀物法廃止以来あまり目立たなかったが、この時は議会に強い印象を与えた。

ジョーゼフは母に書いた。「慎重に述べられ、明確に整理された事実と、コブデン氏の決定的な議論と真摯な訴えを聴くのは大変興味深いことでした...。修辭的な銜いの一切ない彼の演説は印象強く、議会は敬意をもって傾聴しました。実際に彼の言い分はきわめて正しく、政府高官たちはどう答えるべきか知らなくて、かならず幾人かの賛同する“英国国旗の名誉のために”，等々の表現に訴えねばなりませんでした。」

「われわれは皆すべて、われわれの先祖を乗せた乗り物である」と言ったのは、アメリカ人のオリバー・ウエンデル・ホームズだった。若いジョーゼフには彼の先祖たちが非常にしっかりと乗っていた。彼は、ある年配のフレンドの奇妙な主張によれば「非受洗者の四代目」だった。百年以上にわたって、彼の家族の父方母方双方の先祖たちは仰々しい言葉で騙されることを拒否してきた。英国国旗への言及は彼が信用しないところのものだったし、彼の名誉の概念は安易な愛国的表現などからは、はるかにかけはなれたものだった。

この時、国会において、ジョーゼフの私的判断は下院自体によって支持された。与野党ともコブデンを支持し政府は16票差で少数派となり、国民の信を問うということになった。

ジョーゼフは当然総選挙に大いなる関心を抱いた。彼はギルド・ホールでの任命式の場面を記述し、シティー・オブ・ロンドンの選挙人のある人たちを訪ねるために小姓をともない馬車で来たロスチャイルド男爵の娘に言及す

る。しかし選挙の結果は期待はずれだった。コブデン、ブライト、レヤード、そしてその他多くの中国政策反対者の主な人々は議席を失った。

「パーマストーン卿は下院から面倒な議員のほとんどを排除することに成功した」とジョーゼフは家への手紙で悲しげに書いた。

ヨークでは、先代ジョーゼフは息子の政治への熱中をあまり喜んでいなかった。「私はお前が討論に関心を持つ気持ちを不思議とは思わない。」と彼は書く。「私がお前の立場だったら私もそうしただろう。だが、私はお前がそれに深くかかわるとか、下院に非常に頻繁通うことないように望みたい」。

フレンド派の人々はまだ彼らが「公的生活」に入ることが賢明であると確信することからほど遠かった。ジョン・ブライトは1843年にダラムの候補者として立ったが、友人や親類の間で多くの不賛成に出会った。「私は息子が表面に押し出して行くのは好まない」と彼の父は言った。

先代ジョーゼフ・ラウントリーは14年後に、彼の息子も議会に立候補することを望んだとしたら、不安な気持ちを持ったことだろう。もし若いジョーゼフが政界に入ることを**選んだ**としたら、彼の父は彼を支持したことだろう。彼は非常に理解力のある人だったし、若い野心を抑えることによって生ずる挫折感の何たるかを知っていた。船乗りになることができなかった自分自身の後悔がまったく消滅してはいなかったからだ。しかし、彼は息子を、下院にではなく、ペープメント店において見ることをはっきりと望んだ。

若いジョーゼフは政治への関心を弁解しなかった。彼は相変わらず下院を訪問した。——彼は父の意志に対して真の敬意をいただいていたので、多分以前ほど頻々とではないにしても——そして如才なく、家への手紙には討論の長い報告を書くことを止めた。その代わりに、バンベリーに近いシブフォードのクエーカー学校の訪問、人口密集地区のスピタルフィールドの絹織り工の間での仕事から「スピタルフィールドの人道主義者」として知られる高齢のピーター・ベドフォードとの食事、家族の友達の所に滞在するヒッチンへの週末旅行といった、もっとクエーカーに結びついたことで手紙を満たした。

ジョーゼフは家への手紙には言及しなかったが、彼のヒッチン訪問には特別な理由があった。ヨークのフレンド会の学校に居た時に彼が知っていた、ジュリア・シーボムという名の女の子が、その春ヒッチンの彼女の親類の所

に滞在していた。

ジュリアの父親、ベンジャミン・シーボムは生まれはドイツ人だが、子供のときから英国のフレンド派の人々と関係があった。彼の両親はバード・ピルモントのドイツ・クエーカー信者のグループに属していたが、彼らのフレンド派の人々とのつながりは、1800年ごろの、ある英国人女性——ヨークのウィリアム・テュークの娘——の訪問に由来する。バード・ピルモント会議は1814年に再び英国フレンド派の人々の訪問を受けたが、その一人がブラッドフォードのセーラ・ハスラーだった。若いベンジャミン・シーボムはこれらの訪問者たちのための通訳をするように頼まれた。彼は非常に役立つことが分かったので、彼は英国人一行にミンデンとフランクフルトまでだけでなく、結局はスイスと南フランスまで同行するように説得された。この時までには、セーラ・ハスラーはすっかりこの若いドイツ人が好きになっていた。南フランスからカレーに行く途中、彼女は突然、彼と一緒に英国に帰ってほしい、そして彼がそうすることには彼の父の同意を得てると言った。ベンジャミンは驚きはしたが、ブラッドフォード訪問に同意した。彼はまだ17歳にも満たなかった。セーラは積極的にリードするタイプの女性だったらしい。

彼らがブラッドフォードに近いアンダークリフの彼女の家に落ち着くや否や、セーラは彼女の若い庇護者の生活の手はずを彼のために整えはじめた。彼女は彼の英語の勉強、とくに初期のフレンド派の雑誌と会の歴史を読むことを指導した。彼女は親類訪問や、月会と季会に彼を連れて行った。最後に、彼女は彼が、彼女の甥のジョンと同じ時にハダスフィールドに近くの毛織物製造業者の徒弟となるように取り決めた。彼女は二人の少年の下宿を同じ家に見つけた。彼らが徒弟の年季を終えた時、二人はブラッドフォードで一緒に商売を始めた。

セーラ・ハスラーは、若いベンジャミンにフレンド会にとって価値あるものとなるはずの性格を見出した。彼は当時の宗教界で有名人になったが、商売では決して成功しなかった。彼の長い、頻繁な‘奉仕の旅’が何ヶ月も、時には1回で1年間も家から遠ざかった。これほど家を空けることは通常は商売繁盛には通じなかった。そして彼の妻はある時には全くの無収入でおかれた。

ベンジャミンは1831年、ヒッチンのエスター・ウィーラーと結婚した。彼女はヨークのウィリアム・テュークの孫娘で、父方母方の全ての先祖は古いクエーカーの家柄から来ている。彼女はその結婚生活において、すべての彼女が受け継いだ勇気と辛抱を必要とした。しかし、ジョーゼフ・ラウントリーがこの家族の最年少のジュリアに会った時までには、エスターの生活は落ち着いていた。ベンジャミンは早期に退職し（おそらくは当時の手紙のあるものには言及されはするものの説明されてない「困難」のために）、**「アニュアル・モニター」**と様々な「有力なフレンド派の人々」の**「伝記」**の編集でさやかな生計を営んでいた。

ラウントリー家とシーボム家は長年の友人だった。ジョーゼフ自身が生まれる以前に彼の祖母は日記に「ベンジャミンとエスターはワイトビーの集会に出席していて、非常に立派に証言した」と記している。シーボム家の男の子たちはブーザム学校で教育された。弟の方はそこでジョーゼフと同学年だった。家族の中の一人娘、ジュリアは3年間カースルゲートのクエーカー学校にいた。彼女はその学校が新校舎に移転し、名前をマウントと変える直前に去った。若いジョーゼフは、彼女が、質素でさえない色の衣服を着て、季節に応じてグレーのビーバーかトスカナ麦わらのボンネットをかぶって、ヨークの集会に座ってるのに気付いていた。麦わらボンネットには白いリボンと首の後ろを覆う小さな「カーテン」が付いていたが、そのカーテンがある時には「遺憾なことに軽薄な生地で作られていて」、学校当局の譴責を受けた。

ジュリアは丈夫でなかった。彼女の母は一時校長をしたことがあるので、カースルゲート学校の衛生上のあらゆる欠点を知っていた。彼女はセーラ・ラウントリーに自分の娘の健康に注意してくれるように頼んだ。それでジュリアは学校の生徒だった時に、ラウントリーの家をよく訪問した。しかし、1957年の春、彼女は学校を去ったので、彼はいかに好意的だったにしろ、不可避免的に厳しかった両親の監督から安全な距離で彼女に会いに行った。そして、ここヒッチンで恋愛の基礎が築かれ、それがしかるべき時を経て結婚に至った。

ジョーゼフが彼の両親を愛するだけでなく、敬服していたことに疑いは全



くない。しかし、地方都市で自分達だけの世界で存在している人々の小さなグループの間で育ち、学校に行った後の、大都市の自由と匿名性は彼にとって大きな喜びであった。もちろん彼の家への手紙には、彼の帰宅の日程については何も書いてない。というのは、4月17日に彼の父はこう書いている。「お前は、ジョンが2日目の夜にロンドンに居ようとしているのを知って驚くことだろう。われわれの砂糖の在庫の現在状況では、彼が帰ってくるに値するとわれわれは思った... 年次集会が近づく頃に帰宅するのか、それとも滞在を延ばすのか、お前自身の考えを知りたいと思う」。

「われわれの店卸しは、お前も覚えているだろうが、5月の最初の週の間になる。この時に私はお前に店のパートナーになって欲しい... 多分、ジョンがこれについてお前に話すだろう。もし彼がそうしたなら、お前は心に重要と思ったことを何んでも、率直に話すよう、お前に奨めたい」。

先代ジョーゼフは息子が家にいて欲しかった。彼は息子がロンドンにいるのを、明らかにあまり好ましいと思ってなかった。しかし、ちょうど21歳の誕生日を祝おうとしていた若いジョーゼフに課せられた圧力はきわめて軽微なものだったので、ほとんど圧力とはいえないほどのものだった。彼の父は、同じ年齢の時にペーブメントの店を買って、独立を確立した時の自分の気持ちをまだ覚えていたのかもしれない。多分、彼はまだ時々、彼の父と兄の警告、母の心配に満ちた問いかけを思い出していたのかもしれない。それらは不必要だったし、いささか煩わしかった。そこで彼は非常に慎重に息子に手紙を書き、パートナーとして彼がペーブメントにいるのが望ましいということだけを示唆し、店の経営に関する彼の意見を重視することを約束した。しかし、砂糖在庫の状況がこの時点で**本当に**ジョンのロンドンへの旅を必要としたのか、また、若いジョーゼフが真に帰宅する気があるのかないのかを見極めるために、兄が送られたのかどうかはよくわからない。

ジョーゼフは5月末にヨークに戻ると直ちに言った。もう数ヶ月ロンドンにいたかったであろうことには疑いがないが、それは彼の祖母のよく使った言葉でいえば、「あるまじきわがまま」ということになったであろう。彼はもう1冊の頑丈な小さな帳面を買い、彼の父に会って、彼と共に年次集会に出席する準備をした。

1857年のこの年次集会は先代ジョーゼフにとって重要なものだった。過去3年間、彼の時間とエネルギーの多くを費やした主題——フレンド会の結婚規則に関するヨークシャー季会の議事録を提出することになっていた。

若いジョーゼフは書く。「彼は議事録を提出した。長たらしくはないが、僕が思うに、すべての真理探究者を納得させるに十分な長さだった」。

しかし年次集会は納得しなかった。この問題は夜の9時まで討論されたが、「この件については来年の年次集会での好意的考慮を勧告する」という議事録に到達しただけだった。

おそらく、ジョン・ブライトが出席していたら、事態は異なっていたかもしれない。しかし彼は、長い深刻な病気から回復しつつあり、娘と共にイタリアに滞在していた。

この年に提起されたが、やはり、「少なからぬ人々の驚いたことに」延期された件は、「質素な衣服」に関するものだった。その当時はまだフレンド派の人々は、子供や、召使やその他彼らの保護下にある人を「言葉、行動、服装において質素で地味であるように」育てることが要求された。年次集会のあるメンバーがこの件についてかなり長く話した。彼の季会の若者たちは質素であることの義務に関して無頓着であるとは思わないが、彼らの多くは「キリスト教によって認められない信条について聴くことに反対した」。

もう一人のフレンド会員は「死者のはかなさへのあからさまなほのめかし」に反対した、とジョーゼフは言う。「彼はある女性の奉仕上の欠陥は、多くの他の人たちのものより大きなものではないと思った」。

全体的に、これはフレンド会の年次集会としては満足のゆくものではなかったようであった。閉会后、かなり気落ちした家族一行はヨークへの帰路についた。若いジョーゼフはロンドンを去るのが残念だったし、彼の父は長い努力の後に来る反動に苦しんでいた。しかし、彼があれほど一生懸命に力を尽くした結婚規則はまだ変わってはいなかったのだ。

## 第6章 ペーブメントの若きパートナー

21歳のジョーゼフは精力的な若者で、彼の動きのすべては敏速で決然とし

ていた。戸外では、彼は頭を奇妙な角度で後ろに反らせ、空中に何かを見ているかのような格好で、非常に早く歩く習慣があった。その自然的な表情が、当時の言葉でいえば「物思わしげで真面目な」顔を黒髪が縁取っていた。しかしペーブメントの店では、徒弟も顧客も彼が機敏で陽気であると思っていた。彼は特に、田舎の人たちで込み合った市の日が好きであった。

彼の若い徒弟の一人がこう書いた。「これらの日々に彼は精力的に活動し、彼が注文を叫ぶたびにその声が皆の上に響きわたった。」

同じ徒弟は、ジョーゼフが何度か彼を混乱から引き出してくれたことを有難く記憶している。ある時彼がジョーゼフと店の職場主任のところに、顧客帳簿の構成に関して、彼が「下らぬ問い」と呼ぶものを持ってきた。職場主任が説明したが、彼は全然理解しなかった。ジョーゼフは彼の混乱を見て、「この若者に、最も明快な形でどうやるのかを示してやろう」と言った。彼はペンと紙をとり、理由と例をあげて、神秘を説明した。それは機転のきいた外交的手腕の一例だった。その若者はそれ以後、顧客帳簿について困ることはなかったし、職場主任は自らの権威を傷つけられることもないし、徒弟の愚鈍さが顕わにされることもなかった。

しかし、同じ徒弟が、後日、集会で話をした高德なフレンド派の人たちにあだ名をつけたり、からかったりしたことで、ジョーゼフから厳しく叱責された。

「彼らは遠くから来たのであり、私達のために時間を割いてくれたのだ。彼らの努力を貶すべきではない」と彼は言った。

ペーブメントの店の「気まぐれな」徒弟たちのばかげた行為は許されなかった。しかし、会社の一番若いパートナーがしばしば権威を振りかざさねばならないということはなかったようだ。彼は容易に若者たちと協調できた。ロンドンから戻って約半年後に彼は成人学校で教え始めた。これは、ラウントリーの倉庫のちょうど裏にあるかつての轆轤師の仕事場だった所で、毎日曜日の午前中に集まった。

この成人学校は1848年にヨーク・フレンド会が始めた「第一日学校」から派生したものである。もともと日曜日午前中のクラスは8歳から15歳までの男子のために意図されたものだったが、ほとんどすぐに何人かの大人が加

わった。この男達が来たのは、このクラスが読み書きを学ぶ機会を与えたからであり、ということは彼らは勤勉に働く準備のある真面目な人たちだった。1857年までには彼らは30人いたが、彼らを浮わつた小子どもから分離することが明らかに望ましくなった。そこで、ラウントリーの敷地の裏のレーディー・ペケット・ヤードにある一部屋が賃借され、すべての授業が以前そこで行われていたホープ通りのブリティッシュ・スクールから大人（男）たちのクラスが移転した。

レーディー・ペケット・ヤードにおいて男達のクラスは二つに分けられた。ジョーゼフは「B」クラスを、兄のジョンは「A」クラスを受け持った。ジョンは生徒たちの親愛の情をしっかりと捉えた。彼は最初の授業を始めるにあたり、皆にプラム・ケーキを配り、聖書を全巻通読すると宣言した。それから彼は創世記の一章に着手した。これは、勤勉な生徒たちが味わうことの出来た、精神的にも物質的にもおいしい堅固な食物の類であった。ジョーゼフからは、彼らはもう少し思索的なものを得ることになる。

ジョーゼフが、ほとんど全員彼より年長の9人のクラスを担当した時は21歳だった。毎日曜日の午前中に成人学校で教えるのを止めたのは、ほとんど60歳の時だった。この40年間に多くのことが変化した。その終わり頃には大人の男たちに読み書きを教えることは必要ではなくなり、懇親クラブ、図書館、貸与農園、貯蓄基金などすべてが成人学校の仕事に関連づけられた。しかし、聖書の授業は初めの頃と同じく重要なものとして残り、毎週ジョーゼフは、生徒の注意力を惹きつけるために入念に考え抜かれた講義文を作成した。

21歳であっても彼は軽率な若者ではなかった。彼はあるとき友人にこう書いた。「開始した時に僕が有していた以下の資格をもって、この仕事に入るとはできまい。一週間に一回、明晰で実際的な講義を準備することは自分自身にとって膨大な教育的価値のありうることもかもしれないが、それはかなり骨の折れる仕事ではある…。しかし、実践によりだんだん容易になってくるものだ」。

ジョーゼフのクラスの人数は、ゆっくりとではあったが、着実に増えていった。彼は、なれない習字練習用の筆使いに取り組んで、「大きな手」から「丸

い手」そして、最後に「小さい手」へと卒業するのに長時間かけている男たちに対して忍耐力があっただけでなく、生徒達に対して人間として興味をもった。この時から彼は政治的理論を事実翻訳することを学んだ。彼は日曜日の授業に続いて、週日訪問を行った。そして彼の生徒の家で、尊敬に値する貧しい人にとって貧乏が何を意味するかをはっきりと見始めた。それは、彼の思考から決して遠ざかったことのない主題に有益な光をあてた。

ジョンとジョーゼフという裕福な食料品店所有者の息子達が、成人学校の生徒達と親しい間柄をもてたという事実はこの2人の若者についてよく物語っている。学校はすべての人々に開かれていたので、彼らは今は自分達自身の宗教団体の会員とではなく、異なった宗派の人たちと関わったのである。2人の若いラウントリ兄弟には真に階級を超越した、本当に謙虚な心があったに違いない。さもなければ、自分達よりはるかに年長で、社会的に恵まれない境遇の人たちからの信頼や親愛の情を、勝ち得ることはなかったであろう。彼らの教え方に少しでも生意気なところがあったら、授業はすぐに溶解してしまったことであろう。成人学校は、消長はあったものの、50回目の誕生日を祝い、多くの他の社会事業の先駆としての役を果たすまで存続した。

1858年5月に、ジョーゼフはロンドンでの年会に3度目の出席をした。この年は、演説や、いくつかの会合で違った音色が聞かれた。「それは間断なき日照の時ではなかった」と先代ジョーゼフは長男に書いた。にもかかわらず、事態は動いていた。

ジョン・ブライトが戻って来た。彼はまだ病からの回復期にあったが、会の結婚規則について年次集会で演説するだけの元気はあった。集会はあまり彼に聴こうとはしなかった。彼は何度か起立したが、書記の注意を惹けず、再び着席した。だが、ジョン・ブライトは容易に敗北はしなかった。やっと機会を得ての演説は、彼が下院でよくやった強烈な告発調のものだった。

「われわれの会員の何百人、いや何千人という人が、その理由ではどんな教会も正当には除名できなかつた行為のために除名されてきた。これらの結婚ゆえに除名することはキリスト教に反することであり、哲学に反すること

あり、すべての健全な議論と常識に反することである……。人々に拘束衣を着せようと試みるのは無意味なことである。それは他の教会が犯してきた、また我々が今抵抗しようとしている過ちである」。

若いジョーゼフはこのように、自らが賛美する人を報告する。しかし、フレンド会員は、ほとんどのジョン・ブライトの聴衆と比べて雄弁には感じなかった。彼らは最後まで聴きはしたが、会議は休会となった。

しかし、後に、この件のすべてを委員会にまわし、それが一年以内にすべての発見を報告することで合意された。

これは期待はずれの結論だったが、にもかかわらず、ジョーゼフはこの件はほとんど落ち着いたと信じ、実際に彼が正しかった。翌年、先代ジョーゼフの最後の年次集会で、「ヨークシャー・クエーカー会議からの提案」が採択され、結婚規則は変更された。

フレンド会の歴史には傍白で語る声がある。生きているクエーカー教徒の年配の人たちならそれを認識している。そこには、ドライな機知、控えめな表現の真髄、実際的な洞察力の響きがある。ジョン・ブライトの父ジャコブ・ブライトがある時、路上で、自分の馬が足を骨折したのて射殺しなければならなくなった男に出会った時の彼の言葉にその反響を聞くことが出来る。友人や隣人たちが声高にこの不幸な所有者に悔やみを言った。しかし、ジャコブは隣に立っている人に元気よく話しかけた。「私は5ポンドほど気の毒だ。あなたはどれだけ気の毒なのか」と尋ね、それから自分の帽子で募金して歩いた。

これと同じ実際的なせりふは、「会を出て」結婚しようとしていた女性の件を調べに行った二人のフレンド派の人の一人からも聞かれた。泣いている若い女性（彼女は自分の決定を再考慮することを拒否した）を去るとき、訪問者の一人が急に振り向いて言った。「泣きなさんな、娘さん。その男が欲しかったら、もらいなさい。」

昔のフレンド派の人々の霊的美質や美德を告げる手紙や回顧録は沢山あるが、いつも悪意はないが、この辛辣なユーモアを記したものは多くない。ただ、偶然に、忘れられない控えめな表現が時とすると敬虔な歴史をすり抜けて、彼らの子孫たちにこれらの有徳な人たちはいつも厳粛であったのではな

いということ、そして彼らの最良の冗談は、通常はフレンド派の人たち自身をからかったのこと、ということを想起させる。

1858年のこの年次集会において、通常は静かな皮肉な傍白で語る声が公けな批判として響き渡り始めた。新しい精神が会の中で動いていた。すべての昔から確立されている習慣の保存は、実際は、彼らの先人たちがそれによって歩いた昔の光の真の解釈というより、頑固な固執ではないのかと疑い始めた多くのフレンド会員がいた。

「質素な服装」の問題もまた議論された。そして、若いジョーゼフ・ラウントリーの覚書から、彼自身が、これに関する規則を変更すべきか廃止すべき、と考えた人たちの側に立っていたことは明らかであった。

彼はこう記録している。「サムエル・スタージは現行維持に賛成の奇妙な演説をした。しかし、彼が語るのを聴くのはいつも楽しい。彼は実に元気な老人だからだ」。

他方では、トマス・スタットウエイトは、もしフレンド会が彼らの現在の慣行を固執すれば、会の仕事をする人は間もなく白髪の老人しかいなくなるだろうと言った。そしてウイリアム・シスルスウエイトは、宗教は簡素であることを大切にするのであり、服装が問題なのではないと指摘した。

「質素な服装」の問題は結局これも委員会にまわされ、三年後に規律集が改訂された時に「質素」に関連する段落は削除された。それ以後は、フレンド会員の着る服装は、——私的な批判はおそらく続いたであろうが——会の公的な関心事ではなくなった。「お前は子供たちに**明る**いくすんだ茶色の服を着せる」というのは、この後しばらくしてからフレンド会員の女性になされた非難の言葉であり、その子供の一人が1945年にまだ覚えていた。

規則の廃止ということは、材質が豊かでスタイルが単純という服装についてのフレンド会の好みを変えはしなかった。当時の流行は「ひだ飾りとフラウンス、ループ、ドレーパリー、カスケード、シュユート、オンデュレーションの氾濫」だったのに、1870年代、80年代のクエーカー女性の写真は一般的に質素な、長いスカートの黒いドレスを示していた。先代ジョーゼフのような男性は、折り衿のない上着を着続け、それを生涯着た。規則変更のために奮闘し、それにより、多くの人にとり真実の躓きの石だった制約から会の若

いメンバーを自由にしたのは彼らであり、彼らの先見の明と開かれた心のあかしであった。

1858年の年次集会は、全体として会の成長と変化のしるしを表したもので、凝り固まった保守主義者以外の全ての人にとって励みとなるものであったに違いない。もちろん、先代ジョーゼフは、1857年のときよりも希望に満ちた心持ちでヨークに帰った。彼が数年来患っていた鬱病も、ある程度までよくなってきた。そして、その秋に、参事会員たちが満場一致で彼をヨーク市長に選出した時、彼は「彼らの尊敬の念のしるしに大いに感動した」。

しかし、彼はこの名誉を拒否した。彼はそれが来るのを知って、何を言うべきかを知っていた。彼は市長の役職を「市の最高統治者」と呼び、「宣誓の執行との関係」のために断った。

彼が語り終わった時、拍手があった。おそらく、彼の同僚参事会員は彼をいささか変わり者とは思ったかもしれないが、疑いなく彼らは彼を好み、尊敬もした。

先代ジョーゼフは、おそらく彼が拒否した役職の華麗さと重要性を惜しいと思うことはほとんどなかったであろう。彼はまだ57歳であったが、自分が老人であると感じ始めていた。彼は生涯をとうして、商売より多くのことに熱心に働いてきた。そして、今は「他人の肩に責任を移す」機会を求めている。ペープメントの店はますます息子たちの手に委ねられた。ほとんど毎日店には行ったが、もはや徒弟と食事を共にすることはなかった。

長男のジョンは彼が22歳の時にペープメント「一家」の担当となり、店の階上の部屋に住むようになり、世帯主として行動した。1858年の夏に彼はエリザベト・ホタムと結婚し、彼女はかつてセーラ・ラウントリーの努めだったことを引き受け、厄介な所帯を運営し、若い徒弟たちの母親代わりをした。先代ジョーゼフは彼の最初の義理の娘を賞賛し、明らかに、ペープメントの店の家庭的側面を彼女の手任せることにすっかり満足を感じた。ただ、「若者たちの快適のために労を、**経費をも惜しまないこと**」と彼女に強く主張した。

彼は彼のために働きにくる少年たちにまだ責任を感じていたが、ジョンの結婚以来、30年以上もたつ習慣、つまり日曜日の夜に徒弟たちに朗読するこ



とをやめた。明らかに彼はジョンとエリザベトが彼らの屋根の下にいる人々の心身両面の世話をしていることに満足していた。

先代ジョーゼフは1850年11月4日に亡くなった。市長と市当局は、フレンド会埋葬地までの葬列に従った。ペープメントとウォルムゲートの全ての店のみならず他の多くの店が尊敬のしるしとして閉店した。

58歳というのは高齢ではないが、先代ジョーゼフは自分の仕事は済んだと思いつつ死んだ。実際に未完の仕事はほとんど残さなかった。結婚規則に関する彼の長い間の奮闘は死の6ヶ月前に成功した。彼が設立を助けたヨークの男子校は隆盛を極めていた。女子校は、新しいより健康的な敷地に移ることによって、——財務的にもその他の面でも——発展してきた。息子達の生活も確立されていたし、未亡人は立派な家に不自由なく暮らしていた。それは「自己の能力と勤勉と誠実以外にほとんど元手もなく」、21歳でヨークにやって来た若者にとっては少なからぬ業績であった。

父が死んだ時、若いジョーゼフは23歳、ジョンは25歳だった。ペープメントの業務の全ての経営は今では彼らに委譲されていて、彼らは母と妹、それにジョンの嫁に支援された。やり繰りする金は十分にあったが、沢山蓄えるだけはなかった。そして若者たちは彼らの父のその他の多くの責任を引き継いだ。ジョンはフレンド会の2校の経営委員会の書記となり、ジョーゼフは同委員会の父の席を継いだ。彼はまた、当時ヨークでは唯一の特定宗派にとられない学校だったホープ通りのブリティッシュ・スクールの共同経営者として父の後を継いだ。

これらすべてと、更に日曜日の成人学校の授業が、二人の若者の予定をすべて満たした。にもかかわらず、このとき彼はジュリアン・シーボームに会い、いつもはブラッドフォードに、後にはリュートンに行かねばならなかったが、ジョーゼフは彼女との交際をなんとか続けた。時には彼女は、年会のために両親と共にヨークに来たが、こういう場合には若い二人はおびたしい数の親類やフレンド会員の観察力のするどい凝視下であり、人に気づかれずに会って話すことはほとんど不可能だった。シーボーム家がハロゲートに来た時——ほとんど毎夏数週間そうしたように——の方が多分容易だっただろう。たしかに、結婚の8ヶ月前に正式に婚約するまで、ジュリアとジョー

ゼフは何らかの方法で、彼らの感情を家族から隠すことに成功した。シーボーム家とラウントリー家の友情は長年来のものなので、両親から何らかの反対が出るということはあるが、おそらくジョーゼフは自分の事は自分の方法で処理するために一人にしておいて欲しかったであろう。これは19世紀のフレンド会のように密接に団結した社会では容易なことではなかった。

ジュリアの両親は1861年に、ブラッドフォードから若い息子の住んでいたリュートンに引っ越した。もう一人の息子はヒッチンに定住していた。そして、ジョーゼフとジュリアが1862年8月に結婚したのは、この町のフレンド会の集会所でのことだった。

エステル・シーボームは当時の美文調で記憶帳に娘の結婚について次のように記述している。

「ジュリアは彼女の最愛の J.R と共に両親の家を去った…。彼女の小さな帆船には金銀は積み込まれてないが、彼女の友人たちの愛と親切を満載している。彼女は彼女にふさわしい夫に伴われて出て行く、尊いキリスト教徒の家庭の胸中に」。

ジュリアは本当に文字通り、まさにラウントリー家の胸中に嫁いだ。というのは、彼女とジョーゼフはブーザムとセント・メアリーの角の母の家の一部に所帯をもったからだ。ブーザムに面して自分達の玄関があったが、彼らの地下の台所から最上階の使用人室には連絡ドア、或いは、セーラ・ラウントリーの家の各階への通路があった。

それは奇妙な館だった。セーラ・ラウントリーは実践的な気性の持ち主であり、ペープメントの家以来、何年も困難な台所の経験を有していて、彼女の住んでいた当時としては革命的な手段を講じた。彼女は、ジョーゼフが結婚した時に、台所を地下から上へ移し、広大な客間を半分に分けた。その一部を彼女の食堂とし、残りの部分はジュリアとジョーゼフの居間となった。彼女はかつて自分の居間だったところを台所とし、2階の大きな寝室の一つを客間とした。

ジュリアとジョーゼフは、石炭貯蔵所、食料品置場、食器洗い場のついた地下のものと台所を与えられた。1階に居間があり、その上に寝室が2室、

家の最上階に3室の使用人室があった。彼らはすべての4つの階への自分達だけの階段を有してはいたが、それでも潜在的な困難にみちた状況にあったに違いない。実際には何も起こらなかったという事実は、常に対人関係において思慮深い女性であったセーラに負うものであった。若い2人は一般的に日曜日には昼食やお茶のために彼女の家を通り抜けたが、彼女は彼らのところに立ち入りはしなかった。このような旧友を義母として近くに持つと言うことはジュリアにとって楽しいことであったかもしれない。彼女には2人の女中がいたし、ジョーゼフは昼食はペープメントで徒弟と共にしたので、彼女の家庭内の義務は軽いものだった。しかし、夕方はめったに七時まえに帰宅しなかったもので、若い女性が1人で過ごすには長い1日であった。たぶん、ジュリアは、彼女より一つだけ年長のハナ・ラウントリーがまだ住んでいた隣の大きなラウントリーの家に入出入りできることは嬉しいことだったであろう。2人の女性は、ジョーゼフが絶えず妻に促していた「庭のひと廻り」を一緒にした。彼は彼女があまりにも多くの時間を室内で過ごしすぎると思い、新鮮な空気が彼女の健康を改善すると思った。実際には彼は優しくいさめて、あまり長時間火にあたっていないように説得した。

彼女は決して丈夫だったことはない。そして結婚してすぐ妊娠した。おそらく、結婚して1年目のほとんどを通して気分がすぐれなかったようである。彼女は「話し方は率直、態度は快活」と書かれているが、夫と共に写っている写真は厳粛な顔をしている。

マウント学校時代の同学年の人たちの多くが今はヨークに住んでいるので、もちろん彼女はヨークで友達に事欠きはしなかったし、健康状態にもかかわらず、たぶん彼女は子の誕生を待つ期間中、楽しく過ごしていたようである。そうであってほしいものだ。というのは彼女は次の冬を見るまで生きなかったからである。

ジュリアとジョーゼフの娘は1863年5月20日に生まれた。彼らは彼女をジュリア・シーボーム・ラウントリーと呼んだが、彼女の愛称は「リリー」となった。ジョーゼフはいつも幼い子を好んだが、彼自身のこの最初の赤ちゃんは彼にとって大いなる喜びであったに違いない。しかし彼は家族を8月にスカーバラに行かせた。というのは、妻の産後の回復が遅かったので、転地

が彼女のためになることを期待したからであった。

ジュリアはスカーバラを楽しんだ。そして彼女の健康はいくらか良くなったみたいであった。しかし8月の末にヨークに帰り、ほとんどすぐに、突然ひどい病気になった。ジョーゼフは彼女の母を呼びにやり、母は9月4日にヨークに着いた。エステル・シーボームには、彼女の状態が極めて深刻であることは明らかだった。彼女は直ちに、親類を訪問してドイツにいる夫に手紙を書いた。ベンジャミンは、キリスト者の試練と慰めについての手紙で答えたが、彼の妻にはあまり慰めにはならなかった。彼は、ヨークからさらに不吉な2本目の手紙を受け取った後ですら、期待されていたろうように、英国に発とうとはしなかった。娘の死にたいする「キリスト者としての準備」への信頼が彼の勇気を支えたかもしれないが、彼の妻としてはおそらく、たった一人の娘が死につつあった恐ろしい二週間の間彼女を助けて一緒に居てもらった方がよかったに違いない。彼はジュリアの死後数時間して、やっとヨークに到着した。彼女は9月21日に死んだ。死亡証明書は「脳の鬱血」が死因としてある。それはたぶん今日なら髄膜炎と呼ばれるものであろう。

## 第7章 若き日の社会分析

ジュリアが亡くなるまで、ジョーゼフはそれまでの27年の人生を通して、ほとんどのことが順調にいった。彼は楽しい幼年期を過ごし、思春期も彼の父の寛容と理解のお陰で多くの若者よりも反抗的でなく過ごした。かなり若い時から責任を引き受けねばならなかったが、彼はそれに対し準備があった。23歳になる以前に何度か一週間或いはそれ以上の期間、一人でペーブルメント店を任されたこともあった。22歳のジュリアの死は悲劇との最初の出会いであった。

突然襲ってきた妻の最後の病気は、ジョーゼフにとって衝撃であったにちがいない。当時は出産は危険なことだったので、もちろん赤ん坊が生まれる時に彼は心配した。だが、彼女はお産に耐え、ゆっくりと体力を回復しているように見えた。赤ん坊と休暇に行けるほど元気だった。にもかかわらず、何の警告もなく、彼女は病に倒れ、二週間後に亡くなった。ジョーゼフは結

婚十三ヶ月後に、三ヶ月の赤ん坊とともに一人残された。

実際的なレベルでは、すべてのことが間もなく整えられた。ジョーゼフの妹ハナが母の家から例の連絡ドアの一つを通して、彼と共に住み「リリー」の世話をするためにやって来た。彼女は献身的な叔母だった。赤ん坊は、彼女の保護のもとで元気に育った。とは言え、彼の家は若い男やもめにとっては淋しいところだったに違いない。数年間、夜遅くまでペーブメントの店に留まるのが彼の習慣だった。この間の彼の手紙は、すべて「ペーブメント28番地」発となっていた。彼は、ブーザムの家の淋しい自分の部屋に帰るのをそれ以上遅らせることが出来ない時間まで、暗い無人の店の向こうの会計室に座ってそれを書いていたに違いない。

ジュリアの亡くなった次の春、ジョーゼフは休暇をとって、四週間をフランスとスイスで過ごした。従兄弟のジョシュアが同行した。交通費を含めて、この旅行の経費は一人あたり26ポンド5シリング6ペンスだった。ジョーゼフは会計簿に、これは一日につき平均16シリング11.5ペンスだったと記している。これはおそらく十分に出し甲斐のある金だった。それというのも、ジョーゼフはそれ以前外国に行ったことはなく、これが最初の、——彼が晩年に愛することになる国——スイスの訪問であり、少なくとも気分転換になったに違いなかったからである。

彼はほどなく、もう一つのささやかな慰めを発見した。彼は貧困についての統計を蒐集し始めた。

百万人の同朋の不幸な条件についての彼の関心事は、新しいことではなかった。それはずっと以前、アイルランド訪問と共に始まった。そしてその後、成人学校で教えながら、この問題について生徒との会話で控えめなたちで追求した。今や、落ちつかず、孤独な立場にあって、彼は自分の結論を出すことに着手した。

それは社会的良心が、全国で掻き立てられ始めた時だった。そして、産業革命のむき出しの暴力が、産業と直接の接触をもたない人々にもやっと明らかになりつつあった。二世代以上のあいだ、絶え間なく人々は田舎を去って都市に移住した。そして1848-49年と1854年のコレラの流行が、都市生活のいろいろな恐ろしさを暴露した。下水で茶色になった飲料水、12人家族がそこ

で眠り、食べ、誕生と死を迎える1人用寝室、5歳の子供ですら、1杯1ペニーで忘却を求めているのが見られるジンの店。

これらのことは、ジョーゼフが彼の数字をまとめ始める時までには、最近まで貧乏人の「卑しい道は」神によって彼らに割り当てられたのであって、人間によって変えられるべきではないと信じていた人々をすら、悩ませ始めた。もっとも自己満足した観察者を除いて、すべての人が今では貧乏人の重荷のあるものは誰にとっても重すぎて耐えられるものではないということを知った。彼はまた、一般的にヴィクトリア朝時代の「尊敬に値する」貧乏人と、その他の人々との区別をしなかった。彼はすべての問題を科学的に扱い、分析と比較のために彼が集めた広範な統計は先駆者の仕事だった。それは当時の通常の人道主義者の活動とも、ヨークで彼の父によって始められた「スープ給食」や、中世の殿様の奥方が自分の貸家の住人に与えた石炭と毛布とも、ほとんど共通するところのないものであった。

27歳の時ですら、性急で劇的な行動に誘惑されなかったのは、ジョーゼフの特性を示している。彼は現在の悲惨の背後にある根本的な原因を常に求めながら事実をゆっくりと注意深く集めた。彼はイングランド救貧法の歴史を500年遡って黒死病までたどった。しかし、救貧法は歴史の一部に過ぎないことが分かった。国富のあまりにも多くが軍備に使われ、教育には滑稽なほど僅かな金額しか使われてなかったことを彼は発見する。一つのことを他のことに導いた。ジュリアの死後の最初の孤独な数ヶ月間に、ジョーゼフは過去20年間におけるイングランドの貧困者の統計のみならず、国内の男女で文字の読めない者の人数を示す表も準備した。彼はこの数字を、何人が自分の名前を署名することが出来、何人が単に「しるし」をしているかを示している、結婚登記書からとった。少なくともジョーゼフ自身の心中では——貧困と文字が読めないことと犯罪の間には関連があった。彼は1805年から1860年にかけての犯罪の統計を検討した。経済的要因は全体的に複雑な問題の一部だったので、彼は輸出・輸入の数字、国の歳出、人口の詳細、そして‘階級の区分’の分析に取りかかった。

最後の概算のための数字を彼は関税当局による当時の人口の以下のような

分類を用いた。

「100万人 …………… 上流及び富裕者。  
 900万人 …………… 店員，小売商人，等。  
 1800万人 …………… 機械工，職工。  
 100万人 …………… 貧民。」

この素っ気ない表記の裏にある意味合いをジョーゼフは見逃さなかった。彼の統計表は、100年たった今でもはっきりとしていて、そこそこに黒でなく赤インクで強調された数字も色褪せることなく、分厚い青い紙の上に太くまっすぐに引かれた線，彼の感情の強度も衰えていない。彼は数字をまとめ上げた時に小論文を書いたが，その題名は，「英国の文明，それが何に存し，存しないか」だった。

この論文は成人学校教師の会議で読まれることになっていて，彼はそれを1864年中に，リーズとブリストルで読んだ。しかし，若干その調子を下げる必要があった。

ブリストルの会議を企画していたJ・ストアーズ・フライは，この論文を読んだ後，「必ずしも真実が関わらない弱い兄弟たちへの躓きの原因を避けることを望む」と書き，ジョーゼフの言葉が個所によっては強すぎはしないかと尋ねた。

「我々は，厳しい事実を冷静に熟視しなければならない」と，彼は付け加える。

ジョーゼフは，この時点では，戦慄なしには事実を熟視できない心境にあった。彼の原稿はどこで彼が，——多くはないが——削除したかを示している。「弱い兄弟たち」はこれに耐えてもらうしかない。ジョーゼフの冗談すら彼の義憤の強さを反映しているが，彼ら（弱い兄弟たち）を助けるためのいくつかの軽いユーモアもあった。彼が論文で犯罪に触れている個所で，約50年前に判決を下したスタッフォードの裁判官の事件要点の説示を引用する。被告人は，価値一ポンドの偽札使用で有罪とされ，裁判官は彼に死刑を宣告し，よりよい世界（天国）に自らを準備するように勧告し，こう付け加えた。至福なる救世主の仲介により，お前がここで（現世で）はこの国の紙幣に対す

る正しい考慮のために、お前が望むことも出来ない慈悲をそこで（天国で）経験するだろうと私は信ずる」。

1865年にジョーゼフはもう一つの論文を書いた。これは、「英国の文明」についての前のものより短く、より専門的なものだった。そこには引用文は少なかった。そして、公的に発表される前に、以前のものよりはるかに抜本的に削除されねばならなかった。それは、「イングランドとウェールズの被救済貧困」と呼ばれた。

ジョーゼフは今は30歳であり、彼の若い時の自信の欠如はほとんどなくなっていた。彼は彼の生涯のほとんど半分くらいの間、多くの源泉から、——読書から、あらゆる階級の人々との会話から、店の顧客の観察から、——事実を集めていた。「被救済貧困」についての論文において、救貧法の冷静な歴史的解析を通して響き、屋内・屋外の救済活動のさまざまな体制を比較し、除去法に関する技術的な面を議論するのは、落ち着いた、自信をもった大人の声だった。そして彼が、個別的なことから一般的なことに移行する時に、彼の文章は、一人の若者の情熱的な憤激をもってではなく、自らの立場を確信している者の秩序ある権威をもつ響きを有していた。

「保健局医療官は、最近極めて慎重な調査の後に、わが国の人口の五分之一は食物と衣類を十分に得ていないと言明した。天然の富の豊かな、今やあらゆる前例を越えて豊かなこの地において、創造主の似姿に造られた何百万人もの住民が人間性の高度な部分を害する（破壊しないとしても）ほど厳しい生存のための苦闘に日々を過ごさなければならないのは、とんでもないことである...」。

これらすべてについて責任は、ジョーゼフの意見によれば、教会と国家のもとにある。彼らは「途上の膨大な障害」であった。彼らの社会的理念はもっぱら過去の前例のみによって構築されていた。

「彼らは、その幸福が彼らの排他的な特権と共存する**場合**には、人々が幸福であることを歓迎する...。国民と人々の悲哀の唯一の根本的な癒しとしてのキリスト教をかえりみると、この国の組織化されたキリスト者の生活の半分は国家との結合で麻痺させられている。英国のキリスト教が声を上げなければならぬ時、——ジャマイカに虐殺が、香港に阿片戦争があった時、——黒



人奴隷に関して世論がぐらついている時に、二万人の英国教会の聖職者は沈黙している。彼らは自らの体制の権益が襲撃された時だけその言語能力を回復するのであり、例えば、アイルランドの文明の停止には躊躇しない」。

ある人が、この時はJ・ストアーズ・フライではなかったと思うが、彼の論文を修正するように求めなければならなかった。それはフレンド会員にすら強烈すぎた。しかし、これよりはるか後の出来事に照らしてみると、削除されなかった次の文章は記録に値する。

「通常実践されている慈善、贈与の慈善、正義の代わりにする慈善は、それが救済する悲惨の多くを生み出すものであり、それが生み出す悲惨のすべてを救済はしない」。

ほとんど40年後、彼が、築いた財産で三つのトラストを創設した時、管財人へのジョーゼフの指示は彼の気持ちはまだ同じであることを示していた。彼は、貧困の根本原因が明らかにされることに役立つようにお金が使われることを望み、「**明白な貧窮や悪の救済に使われないこと**」を望んだ。「これらは容易に感情を喚起し、それらを緩和するための必要な機関はかなり十分に支援されるものだからだ」。

ジョーゼフは、懸命に数字に取り組み、教会と国家の激しい糾弾を書いていたが、彼自身の立場は事実上攻撃の対象となりえなかったのは幸運だった。フレンド会員と彼らの方法に対してなされ得る批判は沢山あったが、全体的には、彼らは自分達の説教していることを実践していたことを否定出来なかった。彼らは本当に、生活のあらゆる隅々まで彼らの倫理規範を及ぼそうとし、福音書の教えを家庭もしくは店の実際的な行為に結びつけようと試みた。もちろん彼らが必ずしも成功するとは限らなかったが、ジョーゼフが国教会を糾弾したようには、誰も彼らを糾弾することをほとんど不可能としたほどまで成功した。

ジョーゼフのフレンド会への信仰は深く確固としたものだった。彼はクエーカーの弱点を知っていた。彼の父は会の現状について何年間もあからさまに悲観的で、疑問をもっていた。そして彼の兄、ジョンは1858年に、極めて辛辣な批判を含んだ「フレンド会の衰退の原因」についての論文を出版し

た。ジョーゼフは時にフレンド会員を批判することはあったが、彼らの信条の一般的な正しさに対する彼の信仰が揺らぐことはなかった。彼は、生涯のどの時期においても、自らの宗教的信念について語ることは滅多になかった。それは彼が愛読した本に記した文章から推論できるだけである。そしてジュリアの死後二ヶ月して彼の義母に書かれた手紙には次の文章がある。「私は私の父と妻の靈魂が**今でも**天国の高度で聖なる奉仕に従事していると信じないわけにはゆかない。私は現在のところ、ワットレーが、死の瞬間に魂が**完全な無意識**の状態に入ることを支持して言ってることに同意出来ない。私は何千年もの間たぶん実際に消滅するという考えと、私達の愛する人々を天国ではなく墓にいるものとしてイメージしなければならないということに、私は戦慄を持ってしり込みする。あなた、あるいはパパは、この反対の聖書の議論を書いた書物をご存知ですか。」

エスター・シーボームはたぶん励みになるように答えたことだろう。彼女は、深い悲しみを体験していた人だった。彼女が生きている限り、——それは彼女の娘より一年長いだけだったが——彼女と彼女の義理の息子の間は愛に満ちた親密なものだった。

ジョーゼフには、また、これらの年月を通して彼を助ける、彼の年齢に近い友達もいた。彼が以前一緒に外国に行った従兄弟のジョシュア・ラントリーは、今ではヨークの弁護士の所で実務修習生をしていたが、この二人はよく会って、朝、彼らの仕事場まで一緒に歩いた。彼らは多くの興味を共有していた。1865年にジョシュアがロンドンに行った時、彼はヨークのジョーゼフに長い生彩のある手紙を書いた。

これらの手紙の一つにこう書いている。「君は北部で大いなる責任を持っている。社会の解放はそこから来なければならない。ここはまだ中世だ」。

同じ手紙は「人気のあるお雇い司祭」についてのいささか滑稽な話で終わっている。筆者は、「国教会への何らかの言及しないでおく」のは嫌いだからといって弁解する。

こうして、統計を絶望に対する防波堤とし、激しい仕事振り、よき友人たち、そして神に対する真の信仰によって、ジョーゼフは男やもめの時代を乗り切った。彼は、義母の死後もシーボーム家と緊密な関係を保った。ジュリ

アの兄弟、フレデリックとヘンリーは二人とも彼のブーザムでの学友だった。そして彼がロンドンに行った時に、しばしばヒッチンを訪ねフレデリックのところに一、二泊した。

シーボーム兄弟は二人とも、自分達の生計を立てることとまったく無関係な趣味にたずさわるというクエーカーの習慣を持っていた。しかし、こうした副業で人が有名になるというのはあまり例がなかった。しかし、ヘンリーもフレデリックも二人とも自分達の選んだ分野においてその時代の権威者になった。ヘンリーの本業は鉄鋼業だったが、著名な博物学者であり、イングランドと東洋の鳥についての多くの権威ある書物の著者だった。彼は67歳で亡くなった時に、まったく自ら稼いだ財産の十万ポンド以上と、注目にあたいする鳥類学の収集を大英博物館に残した。

フレデリックの職業は銀行業だったが、経済歴史学者として名を上げた。当時、彼は英国における土地保有権の原始的形態と農業の開放耕地制の**専門家**だった。しかし、彼はまた黒死病や義務教育などの多様なテーマについての本を出版した。同時に彼は非常に成功した銀行家だった。テクニシャンとスペシャリストが生活の支配者となる以前の時代においては、こうした経歴もまだ可能だった。

ジョーゼフがエンマ・アントワネット・シーボームに出会ったのは、1867年の冬、フレデリックの家でのことだった。彼女はハンブルグのウイリアム・シーボームの娘で、ジョーゼフの死んだ妻の従姉妹だった。彼女が初めてイングランドに来た時は、まだ21歳にもならない、銀まじりの金髪の華奢な女性だった。

ベンジャミン・シーボームのブラッドフォードでの羊毛商売は事業としては成功しなかった。それでも、彼がその商売に関わっている間に、彼は大量の羊毛をドイツに輸出した。フリーデンシュタールでは、彼の兄弟のジョンが羊毛選別や調達事業を経営していて、ベンジャミンは彼の商品をそこに送った。同じところから他の二人の兄弟、ヴィルヘルムとアウグストはハンブルグとデュッセルドルフに支店を開いた。エンマ・アントワネットはヴィルヘルムの娘だった。彼は、1866年の秋に彼女を数ヶ月間英語を学ばせるために、ヒッチンの彼女の従姉妹のところに送った。

ジョーゼフはこのシーボームの家庭では親しい訪問者であったが、たぶんフレデリックとその妻は、この冬彼の訪問がいつもより頻繁だったことに気づいたことであろう。春には彼はロンドンでの年次集会に出席し、その後再びヒッチンに行った。エンマ・アントワネットはまだそこにいた。いろいろな理由で、彼女のハンブルグへの帰りが延期されてた。

8月にジョーゼフは彼女に求婚した。彼はジュリアの父親にこう書いた。「私は4日にヒッチンに行き、フレッドの所に泊まり、その時トニーが私の渴望していた答えをくれたことはたぶんお聞きになったことでしょう…。私が婚約した人が、あなたに親しい、あなたがた皆に親しい人であり、人々の期待をはるかに越えてわたしたちの心を満たし、いとしいジュリーの場を満たしてくれるらしいことを特に有難く思います」。

家族からトニーと呼ばれていたエンマ・アントワネットは、おそらく、彼女がジュリーのあとを継ぐのがどれだけ困難なものになるかということは理解してなかっただろう。実際には、それは不可能だった。ジョーゼフとジュリーは学校時代からの友達だった。家族のあらゆる繋がり、共有している子供時代の冗談と思い出の遺産をともなう幼い時からの特別な関係は、決して繰り返されはしなかった。アントワネットは自らの歴史をつくらねばならなかったが、それは厳しい課題であったに違いない。この結婚初期の頃、彼女は、実際に、自分は決して知らない亡くなった女性のこだまにすぎない、としばしば感じたことだろう。

彼らは、1867年11月14日に、ジュリアとジョーゼフで行ったように、ヒッチンの集会所で挙式した。二人はデヴォンシャーとヘレフォードシャーで三週間過ごしてヨークの、ジュリアの家だった家に、そして半分は彼女の名前をもつ四歳半の子供のところに戻った。

アントワネットはジュリアとは異なり、生まれつきラウントリー家と親しかったわけではない。彼女は、彼らをどちらかというと圧倒的と感じていたとしても不思議ではない。すべての階に連絡口のある隣家には義母と義弟ヘンリー・アイザークもいた。もう一人の義兄ジョンは1865年にペーブメントの店舗兼住宅を出て、妻と五人の子供とマウント・ヴィラに住んでいた。さらに多くのラウントリーがスカーバラに、セットリントンに、モルトンにも

いた。そしてアントワネットはいまだに異国における、多かれ少なかれ、異邦人だった。それは彼女にとって容易な状況ではありえなかった。そして彼女はまた継娘に責任を負っていたが、この子はおそらくいくらかスポイルされた子供（父親に言わせると「高飛車に命じておいて誰でも言うことをきいてくれるものと思っている」）で、また記憶のかぎり自分の伴侶だった叔母を、当然ながら恋しがった。幸いなことに、ハナは今は家の他の部分に住んでいた。彼女は、アントワネットがジョーゼフと結婚する一月前にジョージ・ジレットと結婚していた。

これら最初の時期がジョーゼフの後妻にその後遺症を残し、それが彼女が歳を取るにつれて彼女の性格のひずみのある程度までの説明となるかも知れない。彼女は生来朗らかな性質の持ち主ではなかった。そして、彼女の義理の家族が自分を先妻と比較してるのではないかと想像し、彼女の継娘の扱いを批判してるのではないかと疑い、あまりにも悲劇的に亡くなったので誰も愛と哀れみなしには語らない従姉妹の残した追憶を強く意識し、あまりにも長い間防御的な立場で生きていたかもしれない。

ジョーゼフはアントワネットにとって寛容な夫だった。ジュリアの死は彼の女性のスタミナにたいする信仰を揺るがせた。彼はもはや、新鮮な空気と運動にせきたてるようなことはなくなり、彼は二番目の子供の出産にあたっては、最初の時以上に心配した。

しかし、ジョン・ウイルヘルムは1868年9月4日、無事に生まれた。そしてアントワネットは、彼が生後数ヶ月してから彼と共にとられた写真では、元気な赤ん坊に喜んでいるように見える。

息子が生まれた年に、ジョーゼフは、彼が徒弟時代以来働いていたペーブメントの店を去って、川沿いのタナーズ・モートのココア・チョコレート・チコリー工場で働いていた、弟のヘンリー・アイザークと一緒にになった。

ジョーゼフにとってそれは大きな変化だったに違いない。それまでの彼の人生はすべてペーブメントの店に結びついていて、彼はそこで生まれ、幼年時代のほとんどをそこで過ごし、17年間そこで働いた。会計室は、彼の前に父の避難所であったように、彼の避難所だった。今ではすべてが違った。

しかし、もう一つの変化がくることになっていた。彼の初期の人生の最後のつながりがそれで切られることになる。その年の4月に娘の「リリー」が重い咽頭炎を患った。患って一ヶ月後、ジョーゼフの父を看病した老齡の非常に愛されたクエーカーの医者のカレブ・ウイリアムズが、彼女は猩紅熱にかかっていると診断した。一週間後、彼女は亡くなった。

ジョーゼフにとってこの悲痛は両刃の剣だった。彼はこの娘を熱愛していて、当時の父親が彼らの子供を知る以上に、彼女を親密に知っていた。通常の場合だったら母親に属した、彼女に対する家庭内での責任も、あるていどまで彼が引き受けていた。そして彼女は、彼の「最愛のジュリー」との最後の触知できるつながりだった。

家庭内には、悲しみだけでなく不安もあった。それは、赤ん坊のジョン・ウイルヘルムは生後八ヶ月にすぎなかったが、皆は彼に「リリー」の猩紅熱がうつったのではないかと恐れた。しかし幸いに、彼は感染を免れ、やがてジョーゼフは妻と赤ん坊を転地療養に送り出すことが出来た。彼自身はヨークに留まった。彼はたぶん、彼が学びつつあった新しい仕事が、彼の時間とエネルギーを必要としたことを歓迎したことだろう。今では、朝は、ブーザム門をくぐって、町をつきってペーブメントに行くのではなく、レンダル橋まで歩き、川を渡ってタナーズ・モートに着いた。それは彼の生涯の一時期の終わりを記した変化だった。